やぁどうも
至って快調です

健康で精力的な活動を続けるにはまず疲労をとることが肝心です。　働き盛りの男性はエナルモンA錠をおためしください。





帝国臓器

男性用総合ホルモン剤
エナルモンA錠
更年期諸症・精力減退・五十肩・疲労など　30錠 700円

「中外」の胃腸薬

カートンで健胃・快腸

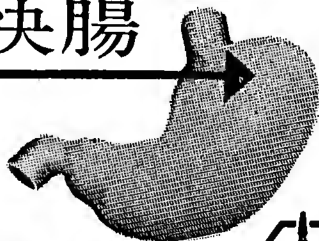
「胃の痛みや、胸やけがとれます」「食欲が増し、消化がよくなります」…これがカートンの効きめです。胃や腸の調子が悪くふとれないような方は、ぜひ

適応症：胃痛・胸やけ・食欲不振
腸内異常醱酵・慢性下痢・宿酔等

(錠剤) 52錠—100円　(粉末) 15包—100円
(散薬) 30g—100円　　　　 24包—150円

◉カートンの錠剤は殊にのみよく便利です

中外製薬株式会社





中外製薬



第一製薬

精(スタミナ)がつく薬 **パント錠**

20錠　50錠　100錠

副腎・肝臓強化　パントテンサン製剤

ムズムズ病!

虫にさゝれて　ムーズ ムズ
じんましんで　ムーズ ムズ
雑草かぶれで　ムーズ ムズ
お化粧かぶれで　ムーズ ムズ



かゆいときにはコーワの
レスタミン軟膏

●ハイキングに ご家庭に!
よい香り よくのびる クリームみたいなお薬です。
一〇〇円

Kowa
興和新薬株式会社
東京・名古屋・大阪・福岡

ダットサン　**ブルーバード**

日本のハンドボール界に寄す

来朝ルーマニア選抜軍団長

ヴァシレ・ツードル（談）



我々一行の日本訪問のために、お骨おり下さった、日本ハンドボール協会の各位と、各地ハンドボール関係者、それに我々の試合を観戦し、声援して下さった皆さんに、まず御礼を申上げたい。我々は、昨年ウィーンで開かれた世界選手権に準優勝したチームの主軸選手を中心に、特に日本訪問のため編成したチームで、世界のトップレベルにあるチームだと自負している。我々のプレーの特長は、各地の試合で皆さん方自身に見つけていただくとして、我々のプレーのどれかが、日本のハンドボール界のお役に少しでも立てば、これに優る喜びはない。日本はスポーツの盛んな国だと云うことを聞いており、ハンドボールも若い人々の間で関心の持たれている競技の一つだと云うことを知って、同じハンドボール選手として大変嬉しく思っている。

しかし、残念乍ら、日本のハンドボールについて、ルーマニアではもち論ヨーロッパでも、その実力と情勢はほとんど知られていない。もっとも、私は今度来日するに当って、先年来日した西ドイツの人から若干話を聞いてはいたが……。私が、日本のハンドボール界に口ばさむ失礼を許して下さるなら、それは時ある毎に、ヨーロッパのハンドボール界に接触して欲しいと云うことだ。これは決して日本のハンドボール界にとってマイナスになることではない。もち論、世界選手権にも参加して欲しいし、これは男子に限ったことではなく、女子に於いても同じことが云える。

技術的には、まだ全日程を終了したわけではないので、正当な評価はさけたいが、個々には国際舞台に立っても充分やっていける力倆の人が居ると云うことだけは言明出来る。しかし、チームとなると、本場の上位チームとは少々差があるのではないだろうか。その意味からも、前に述べたように、ヨーロッパハンドボール界の技術と動静に絶えず接触していくことが望ましいと思う。

それから、一九六四年、東京で開かれるオリンピック大会に是非、ハンドボールが採用されるよう、日本ハンドボール協会の絶大な努力を期待したい。

これは、私一人の念願ではなく、世界ハンドボール人共通の願いでもあり、夢であると云うことが云える。

我々も、出発前、ルーマニアのオリンピック委員会に、このことが実現するよう運動して欲しいと云うことを云っておいた。

日本の皆さんとは、今度一ケ月ばかりでお別れだが、四年後、東京でお目にかかれることを楽しみにしている。

最後に我々はビューティフルな試合を各地で行うことを皆さんにお約束したい。

あなたがたの雑誌を通じて、日本のハンドボールの関係者やファンの皆さんによろしく。

JUDOR VASILE

（この一文は、本誌のために、特に多忙な日程をさいてルーマニア選抜軍団長ヴァシレ・ツードル氏に六月十九日、東京スポーツマンホテルロビーでお話願ったものです。通訳の労をとって下さったアウリカ、カンペアヌ、奈良高両氏にこの場から御礼申し上げます。文責・編集部）

註・ルーマニア選手団一行は約一ケ月間各地を転戦完勝（10試合）をお土産に七月五日離日帰国す。



ルーマニア来日，出迎えの人々に応える選手団

好転するかハンドボール

東京五輪組織委21種目実施を確認

IOC総会（九月）で正式な決定

ハンドボール関係者の関心を集めている一九六四年のオリンピック東京大会ハンドボール競技の採否問題は、その後も実施種目問題の一要点として、関係すじで検討が続けられているが、最近オリンピック東京大会組織委員会競技特別委員会で、当初の予定通りハンドボールを含む二十一種目の開催を再確認しており、事態は僅かながら好転したと見られている。

　ルーマニア来日の第一回の記者会見が六月十五日夜、東京高輪の光輪閣で行われた時のことである。報道陣の質問が一段落した時、一行の首脳陣ツードル団長以下クンスト監督、カンペアヌ役員らが急に立上って、ツードル団長がロシア語で何かをしゃべり始めた。熱をおび、ゼスチヤアを交えたそのしゃべり方には何ものかを期待していることが、言葉は通じなくても判るようだった。やがて通訳を通してツードル団長の言葉が「我々世界のハンドボール関係者は皆、一九六四年のオリンピック東京大会で、ハンドボールが実施種目に採用されるよう心から期待するものである。日本の協会関係者の努力とニューズマンの方々の御理解と協力をお願いしたい」と云う主旨のものであることが判った。これは、今度の国際試合に際して幾度びか行われた記者会見の中でもっとも感激的なものであり、同時にこの時ぐらいその場の空気が緊張した時はなかった。

　記者会見と云うものの通例からして、この程度の内容のやりとりは必しも珍しいものではなかったが、しかしヨーロッパのハンドボール界がいかにオリンピック東京大会においてハンドボールが実施されるか、されないかと云うことが、大きな関心を持って見られているかと云う一つのエピソードとして見逃すわけにはいかなかった。

　本誌の創刊号〃今月の問題〃欄でこのオリンピック東京大会のハンドボール採否問題をとりあげたところ、その反響は、創刊号のどの記事よりも大きかった。このようにして、オリンピック東京大会におけるハンドボールの採否問題は国外的にも、国内的にも、非常に多くの、そして大きな関心と注目をあびていることが判りこの問題もいよいよ九月のIOC（国際オリンピック委員会）総会までには、JOC（日本オリンピック委員会）としても結論を出すことになっており、大詰を迎えた感じが強い。果して採用か削減か。ことのなりゆきを見つめてみたい。

　そもそも、この問題——つまりオリンピック東京大会種目削減案が公けにされたのは昨年の十一月十二日、ローザンヌにあるIOC本部で、IOC本部事務局長のオット、メイヤー氏が「IOCは日本に対し、オリンピック東京大会における実施種目について十八種目か、十五種目に削減、縮少するよう提案したい」と云う発表をした時に始まる。JOCでは、この発言が入電されると同時に田畑オリンピック組織委員会事務総長が記者団に対し「二十一種目を開催、実施すると云うのは東京オリンピックの招致を有利にするためで、実際には全部行うのはムリがある。常任委員会でいずれ、この問題は十分検討するが、もし削るとすれば、これまでのオリンピックに日本からまだ参加したことのない近代五種競技、弓、ハンドボール、バレーが対象になるだろう」と発言したからハンドボール界にはかなりの衝撃になってはね返ったわけだ

しかし、たしかに、規模ばかり大きくなってお金がかかり、しかも国民になじみのない種目を、ムリしてまで開催すると云うのも現状からすれば再検討されてよい問題である。だからと云ってハンドボール界からこの問題を眺めれば、ようやく国内的にもハンドボール競技が認められて来た折、オリンピック東京大会からはずされてしまっては、その受ける打撃は誠に大きい。IHF（国際ハンドボール連盟）にしてみても、オリンピックにハンドボールが採り上げられるのは一九三六年のベルリン大会以来のことであり、大きな関心と期待を寄せていることは、ある意味では、日本の国内以上のものがある。

　オリンピックでその大会種目を削ろうと云う動きは、今に始ったことではない。ただ、東京大会では、オリンピック憲章に決められた21種目全部を開催するとJOCが回答したために、善意に解釈すればIOCが「ムリをするな」と云った程度と見てもあるいはよいだろう。だが、回答に規模の大きくなるオリンピックそのものに、国際的な問題として〃縮少説〃が出ていることは事実であり、その矢先、そうした傾向とは逆に、東京大会が全種目を行いたいと回答したのだから、IOC、JOCともに難しい立場にあると云えよう。

　オリンピック大会では、その憲章に決められている二十一種目の中からならば、何種目行おうと、その開催地の自由である。ただ、必ず十五種目以上行わねばいけないと云う最低線だけが定められているわけで、開催地の能力とにらみ合わして実施種目を検討する余裕が含まれているわけだ。東京の場合は、JOCに対して二十一種目開催可能を回答し、その施設などを明言したものである。そう考えて来るとこの問題は、当然のことではあるが、JOC、あるいはOOC（オリンピック東京大会組織委員会）の動向が非

斯界最大の感激

……オリンピック・ハンドボール実現せば……

技術の向上と運営能力の養成が急務

心配されたオリンピック東京大会の種目縮少案も、大巾な削減はなさそうだ。ハンドボールの実施もかなり有望のようである。もち論、九月のＩＯＣ総会で正式に決定されるまで楽観は許せないが、少しでも実現に向って好転したと云うニュースは、ハンドボール関係者にとって誠に明るい希望の灯をともしてくれたと云えよう。日本のハンドボールも苦節し文字通り苦款一十余年にしてようやく国際的な脚光をあびることは感激にたえない。ましてや、オリンピックでこの競技を実現出来ることは斯界、最大の感激であろう。オリンピック東京大会でハンドボールが正式種目として行はれることになれば、オリンピックとしてハンドボールが採り上げられるのは、その史上、一九三六年のベルリン大会に次いで二度目であると云うのも大変、意義のあることである。

周知のようにハンドボールを国技とするドイツで開かれたベルリン大会であってみれば、ハンドボールが正式種目として行はれないのがむしろ不思議なくらいであり、それ以後もヨーロッパでオリンピックが何回か開かれながらハンドボールはついぞ採り上げられなかった。そのハンドボールを国際ハンドボール界では後進国の日本が採用に努力を払い、実現有望とまで云はれるまでにこぎつけたのは関係者の尽力と、日本スポーツ界の非常な理解のもとによるものであろう。

聞くところによれば、ヨーロッパ諸国のハンドボール界の、オリンピック東京大会ハンドボールに寄せる期待は想像以上のようで、ルーマニアの一役員が「東京大会でハンドボールが行はれると云うのでルーマニアではこの東京大会が、がぜん注目と関心を持って見られるようになった」と云ったとも聞く。さて、実際にオリンピック東京大会の種目に正式に加えられたらば、その場からまた新しい問題が沢山待ちうけている。「いざやると決れば、もうどんな苦労も喜んでやります」とは協会の話だが、しかし、男子競技のみを実施するのか、女子も加えるのかグラウンドの問題もそうだし、観客の動員も今から考えたって、一こう早くはない。それより何より日本チームがどの程度の成績をあげられるかと云う大課題も早急に具体策を考じなければいけない問題である。国内のレベルは、ルーマニア戦を見ても必しも手ばなしで今後の向上と躍進を期待出来るとは思えない。東京で開催し、日本が先頭を切って参加する以上、良い成績をあげなければ何にもならない。入賞をして欲しいと願うのは人情だろう、技術的な向上と同時に大会の運営能力を養っておく必要もある。これまでの日本のハンドボール界は、国際的規模の大会の経験が少いし、そうした大会を見聞する機会にも恵れていない。ハンドボールのメッカであるヨーロッパと離れているのが直接の原因だが、しかし大会の運営と一口に云っても試合の運営ばかりではないし、オリンピックともなればその規模は更に大きく広い。東京大会にハンドボールが正式に採用と決ったら、技術担当面と運営担当面を協会はその人事構成の上ではっきり二分し、万全を今からつくすべきである。（黒尾武）

常に大きな意味を持って来るし、ＪＯＣ、ＯＯＣの承認と決定が再確認されれば、まず、その日本側の原案通りＩＯＣで確認されることは間違いないだろう。

つまり、この問題のカギはＪＯＣ、ＯＯＣの動きに握られていると云うことであるその意味で六月十四日、東京虎の門の霞会館で行われたＯＯＣの決定は、ハンドボール界にとって、見通しの明るい、希望の持てるニュースがあった。すなわち、この日の席上ＯＯＣとしては、国体で行っている種目は全部行い、当初の予定通り二十一種目の（柔道が正式種目に加えられた場合は二十二種目）実施を再確認したと云うニュースがそれである。もち論、改めて説明するまでもなくハンドボールは国体種目として昨年の東京国体では七五一人が参加、この数字は陸上、軟式テニスに次いで三十種目中、ボール、バレーボール、バスケット五番目に当るものであった。もち論、十四日のＯＯＣの決定は、最終的なものではなく、更に今後、運営、開催上の諸問題や、種目の普及状態、発展状態を細部検討したあとで、正式な決定がＩＯＣに対して報告されるわけだが、まず、現在の見通しではかなり前途に明るい希望を持たせたものと云い切ることが出来よう。また、この問題の直接の発火点となった、ＩＯＣとしての種目縮少案と云う基本方針は、同日、田畑ＯＯＣ事務総長の発言によれば、「現在、ＩＯＣでは、オリンピック実施種目削減を強く打ち出して来ているが、オットメイヤーＩＯＣ事務総長に聞いたところ、種目削減は東京大会の次の大会からで、東京では回答書通り実施するのが原則であると云う解釈で行っていいと云うことだ」（日刊スポーツ六月十五日付）そうで、ますます、ハンドボールがオリンピック東京大会に実施される可能性は強くなった。組織委員会が㈠国体種目である。㈡国内、外に広く普及している種目。㈢比較的経費がかからないと云う実施種目の基本条件を大巾に変更しない限り、ＪＯＣとして、ハンドボールをオリンピック東京大会種目から削る特別な理由はないと見ても差支えないだろう。

なお、オリンピックでは、団体競技は、六ケ国以上の国（チーム）が参加しない場合は実施種目から除外される規定があるが、この点では、この記事のへき頭に述べたように、ルーマニア選手団の発言でも判る通り、ヨーロッパ諸国の関心はなみなみならぬものがあり、その心配は毛頭ない。

正式な決定は、来る九月、ローマで開かれる第五十七回ＩＯＣ総会の席上になされるわけだが、その時こそ、日本のハンドボール界が世界の桧舞台に立って技術的にも運営面でも、これまでの二十余年の成果と直価を世に問う時であると云えよう。

ツ団長、田畑氏を訪問

ツードル団長以下、ルーマニアチーム役員は、六月二十一日、東京御茶の水の岸体育館（体協）に東京オリンピック組織委員会の田畑事務総長を訪れ、一、オリンピック東京大会にハンドボールを是非加えて欲しい、一、その際のエントリーについては現在でもドイツ、ソビエット、オーストリア、ポーランド、ハンガリー、ルーマニアの最低六ケ国それにスイスが加る意向を示しているので参加国については保証する旨を話合った。

待望のルーマニア・ハンドボール・チームは六月十五日午後五時十分、香港からの日航便で羽田空港に到着。ヴアシレ・ツードル団長、イオン・クンスト監督兼国際公認審判員、アウリカ・カンペアル副団長、アウレル・ブルガル主将ら二十人の一行はブルーのブレザーコートに身をつつみ、長途の旅疲れも見せず、空港に出迎えた式場隆三郎会長、高島列理事長ら日本のハンドボール協会役員、関係者と交歓した。午後七時からは東京高輪の光輪閣で行はれたレセプションに臨み、協会心づくしの歓待に応え、このあと神宮外苑のスポーツマンホテルに旅装を解いた。

翌十六日、休む暇なく東京小石川球技場で全早大と来日第一戦を行い、一九五九年度世界男子十一人制準優勝チームの貫録を示す、好技、妙技を披露した。そこで本誌ではルーマニアチームの試合ぶりをつぶさに観戦した協会関係者の感想や記者クラブの協力を得て国際試合前半の模様を紙上に再録することにした。

ル軍、全早大を大破

身についた攻守の基礎技術

鴛尾武治
（共同通信運動部）

第1戦

ルーマニアチーム来日第一戦全早大との試合は六月十六日午後二時十分から雨の小石川グラウンドに七百の観衆を集めて主審荒川清美（日体大OB）、副審大房、石井三氏審判で行われた。

S	得	【ル　軍】		【早大】	S	得
0	0	カベルプッシュ	GK	久保	0	0
0	0	マルク	FB	荒木	0	0
0	0	K・セラル	FB	西沢	0	0
0	0	イリエスク	HB	山口	0	0
0	0	ニテスク	HB	北沢	0	0
0	0	V・セラル	HB	森岡	0	0
3	3	コスタケ兄	FW	吉田正	9	1
3	2	コスタケ弟	FW	平塚	0	0
6	4	ナデア	FW	恵谷	11	2
6	3	ナト	FW	塩坂	0	0
13	7	ブルガル	FW	長沢	8	1
0	0	コバッシュ	交代	吉田哲	0	0
0	0	レドル	GK補	山田	0	0
31	19	1	14MT	0	28	4

ルーマニア選抜軍 19（13−0／6−4）4 全早大

後記

世界第二位のチームと関東学生リーグ第五位のゲームでは点差が大きく開くのは当然の話だ。全早大はOBを一人二人を投入したところで勝てないことは最初からわかっている。ただ興味は全早大がルーマニアの強力なFWをどう防ぐかになった。ルーマニア選手がグラウンドにおりた時、下半身のたくましさ、とくに脚力の強さには驚いた。ランニングをみてもストライドが大きく、全早大選手は足もとにも寄れない鋭さがあった。試合前の練習をみても手が大きいのでボールがスッポリ入り、日本で見られるソフトボールの感があった。シュートにしても手首が非常に強い。だからスナップ・スローを多投した。それが高めに入るので背の低い全早大のGKがいくらジャンプしても効果がない。それもかなりのスピードを持っているので手のつけようがなかった。全早大には全く気の毒なゲームといえる。総監督の宮崎君も監督の萩原君もさぞ頭が痛かったことだろう。（宮崎君には数十年ぶりに会った）

○……ルーマニアのパスはスピードがある。早大陣内に殺到する図はさながら怒涛の如き感があった。大きなパスを高くあげ、ボールの落下地点に集まる速さは大したものだ。FWの縦の突進力とはこれをいうのだろう。日本のチームには見られない速攻だ。選手のスピードを数字で表わすと百メートルを最高11秒3、最低13秒4だ。平均12秒で走っている。これでは追いつけない。長身のブルガル選手の走力には驚いた。全早大の選手がデイフェンスを固めようとしてもこのスピードに押されて、ブルガルに近ずこうとしてもそれができない。それほど威力があるわけだ。全早大の攻撃もまずかった。ルーマニアの逆襲を恐れてハーフ陣をFWに投入できなかった。つまりFWに五人だけでルーマニアのバックス（六人）にぶつかった。力が対等ならそれでもいいが。段違いの力に対してこれでは得点できない。防禦にしてもルーマニアの六人に対してバックス五人、どうヒイキ目にみてもいただけない。ルーマニアのFWは幅が広く、両サイドもよく使っていた。防禦にしてもマン・ツー・マン防禦。早大の選手にピッタリくっついて離れない。これでは早大FWが動けないわけだ。しかもデイフェンスは厚く、幅が広いので早大の立入るスキをあたえなかった。すべての点で早大は見習らうべきだ。もっともこれは日本の全チームに通じることだが……。

○……スピードあるシュート。それがしかも正確そのもの。31シュートで17点をあげた。その確率は大したものといっていい。ブルガルはゴールから15メートルの地点でロング・シュート。それがすべてスナップ・スローだから立派だ。しかもゴール前のルーズ・プレー、球をキープしてからのフェンス戦法、早大はこのフェントにひっかかっていた。後半の早大は善戦した。1分40秒に恵谷が右スミにゴール、その後11分まで両チームに得点がなかった。11分3秒に長沢、12分にフリー・スローを得た恵谷がゴールして後半3−3と互角に渡り合った。ルーマニアは力をセーブしていたことだろうが。前半のようなスピードは見られなかった。このチームで気のついたことはルーマニアの臨機応変の措置だ。背の低い日本チームがいつ低めのパスをやるか。これをよくみていた。早大が低めのパスを見せたとき、両腕をピンと伸ばしてカットしていた。さすがは世

界第二位だと感心した。第一戦はあいにく雨が降ったが。この雨中戦でもルーマニアはハンドボールの基本技をみせてくれた。それはボールを受けるとき、雨でスリップしないように胸を出して受けていた。このパスは日本のチームは大いに見習うべきだ。それに転倒しなかった。これは転倒すればそれだけスピードが落ち、攻撃にアナがあくからだ。突差のプレーが瞬間的に出るから基本技を完全にマスターすることが、いかに大事であるかを物語っている。



ブルガル主将の豪快な攻撃に全中大バックス手が出ず

ブルガル一人で13点
全中大の速攻先制も竜頭蛇尾

第2戦

ルーマニアチームの第二戦、全中大との試合は六月十八日、好天無風の好コンディションにめぐまれた東京小石川グラウンドに二千の観衆を集めて主審岡村昭二（教大OB）、副審大房、奥村三氏審判で行われた。

ルーマニア選抜軍 28（11－2、17－5）7 全中大

S	得	【ル　軍】			【中大】	S	得
0	0	レドル	G	K	磯村	0	0
0	0	マルク	F	B	井	3	1
0	1	K・セラル	F	B	福士	0	0
1	1	イリエスク	H	B	沢辺	0	0
1	1	ニテスク	H	B	清水	0	0
0	0	V・セラル	H	B	武田	0	0
2	2	コスタケ弟	F	W	田中	1	0
2	2	コスタケ兄	F	W	平瀬	7	4
11	4	ナデア	F	W	大脇	6	2
6	4	ナト	F	W	阿部	5	0
16	13	ブルガル	F	W	小林	2	0
1	0	コバッシュ	交	代	上垣内	0	0
39	28		2	14MT 0		24	7

後　記

杉山　茂（NHK運動部）

○……グラウンドコンディションは第一戦とは比べものにならぬほど良かった。それだけにルーマニアの真随に触れる最初の機会であったわけだが、強引なルーマニアチームのプレーの前に全中大はあっと云う間に押しつぶされ、彼らの〝特長〟を引き出すにはほど遠かった。

○……全中大の出足はよく、その鮮かな速攻はルーマニアの機先を制したかに見えた。まず開始1分短躯のCF大脇がするすると相手バックスの密集を抜いて右サイドからクリーンシュート、続いて2分20秒、同じような型からRI平瀬がGKレドルの肩口を襲うシュートで2－0。ルーマニアはこの全中大の出足にやや押され気味で開始3分間に珍しくも3本のミス・パスを演じ、その後の全中大試合展開に大いに期待がかけられた

○……しかしルーマニアは3分10秒エースLWブルガルが大きなフェイントから全中大HB陣を抜いて2－1とし、7分、8分にもこのブルガルが連続シュートを決めて逆転した。特に8分のシュートはポストに入ったブルガルがパスをすると見せて体を大きくひねりひねった体の逆にシュートすると云う完全に彼の卓越した個人技で決めたものでこのブルガルの好技に全中大はドキモを抜かれたか、僅か開始10分にしてその速攻がピタリと止ってしまった。

○……こうなってはルーマニアのペース。敵陣に運んだボールの九分通りをゴールに結びつけて20分には10－2と開いた。なにしろセンターライン、35メートルラインをあっと云う間に走り抜けてフリースローラインの一歩手前で飛び上りざま自在の方向にシュートを放たれては定評ある井、福士のFBコンビや清水、武田両OBの巧技に頼ったHB陣も殆どなすすべがないままに前半を終った。

○……ハーフタイム、中大ダンス部のフォークダンスを拍手しながら見つめるルーマニア。ベンチに座って〝いけません〟と云ったような全中大。後半の勝敗は戦わずにして明らかだった。桑原中大監督も「こんなハズではなかった」と云いたげな表情ながら、スコアボールドの7－5と云う〝事実〟が目の前にあっては一言もない。

○……後半のルーマニアはブルガルを退けて控えのコバッシュを登用、センタースリーが、守陣に残ってHB三人が攻撃に行くと云った余裕を見せた。一方全中大は必死の反撃を見せるが固い相手の六

人守備をどうしても崩せない。長いリーチのディフェンスに無闇に突入しては、自らの動きをとめると云う策のなさも手伝って点差は縮るどころか開くばかり。

○……二十一点差と思いもかけぬ大敗に終ったこの試合は、結局、盛上りは開始後五分間だけで、ヤマ場らしいヤマ場もなく、実力の差をまざまざと見せつけられたような風戦だった。体力差―それだけで片付けてはいけない何かが底に流れている感じであった。

○……健斗の大脇を肩車して、はしゃぐルーマニア選手群の顔には国際試合なれした余裕と同時に物足らなさが読みとれた。果してどのチームが彼らの顔をこわばらせ、彼らの懸命なプレーを引き出すことに成功するだろう。秀れた脚、弾丸のようなロングシュート。彼らの秀れた馬力の前に日本は一矢も報えずに終るのだろうか

技術評

荒川　清美

（日体大監督・協会理事）

もう少し、全中大に思い切ってやって欲しかった。ロングシュートでもカット、インプレーでも大たんに行うべきであったろう。ルーマニアは球出しが早く、しかもGKからサイド、サイドから中央そして再びサイドに返して、チャンスをうかがうと云うオーソドックスな戦法が非常によく身についている。全中大はボールの廻転は早かったが、殆んどスタンディングのままでパスを行っており、これでは何もならない。それに第一の敗因は前半の30分間を対等に走り切れぬスタミナの不足である。これは全中大ばかりの問題ではなく、歩巾の大きい外国チームと対戦するには極端に云えば倍以上のスピードを要求されるだけに、日本のハンドボール界全体の課題として考えねばいけない。ともあれルーマニアの理にかなった攻防を見ては自信の出かかった日本のハンドボール界ももう一度我身を見なおす必要があろう。

（ディリースポーツ東京本社運動部）

第3戦

全日体大、善戦及ばず

後半　ル軍を上廻るパスワーク

ルーマニアチームの来日第三戦全日体との試合は好天に恵れた小石川グラウンドに五千四百の観衆を集めて六月十九日午後二時八分から主審松本重雄（教大ＯＢ）副審浅野、安藤三氏審判で開始。

ルーマニア選抜軍 18（11―5 / 7―6）11 全日体大



ＦＷナデアの速攻に日体大ＢＫ渡辺反則す

得	S	【ル軍】		【日体】	S	得
0	0	カベルプッシュ	G K	北川	0	0
0	0	マルク	F B	石松	0	0
0	0	K・セラル		久保田	0	0
0	0	イリエスク		渡辺	0	0
0	0	ニテスク	H B	東	0	0
0	0	V・セラル		松田	0	0
6	7	コスタケ弟		山下	3	2
1	3	コスタケ兄		青木	0	0
3	7	ナデア	F W	竹野	5	4
5	8	ナアトル		栗山	6	3
3	9	ブルガル		井上	4	1
0	2	コバッシュ	交代	北山	0	0
0	0	レドル	GK補	福田	0	0
18	33	2	14 MT	0	18	11

後記

小川　励行

全日体大が対ルーマニアの策戦に充分研究をつくした意欲的な攻・防を見せたので見応のある、第三戦にして始めて試合らしい試合が展開されスタンドを湧かした。しかし結果的には、全日体大は後半五分に戦ったが、前半の失点が大きく、この差を挽回出来ずに、善戦の域にとどまった。

◇―立ち上りの全日体大はCF竹野を巧くポスに使い、栗山、山下らがよく走ってルーマニアのディフェンスのラインを突破して1点差でついていった。このあたりさすがのルーマニアも全日体大の強い当りのディフェンスに、やや浮き足だったかっこうだった。ゴール前でのローリングのパスでなんとかシュートのチャンスをうかがおうとする消極的攻撃となり、一、二戦で見せたような強引なシュートと突込みは見られなかった。

◇―ルーマニアはスローのオフを得てすぐさま2―0をリードした。しかしその後は第一線マンツーマンの、第二線ゾーンのディフェンスのねばっこい全日体大のバックスとGK北川の好守に手を焼いた。逆に全日体大に果敢な速攻を展開して一点入れられればすぐ返すという好調な出足を示して前半20分までは4―3、5―4という接戦を演じて見味を呼んだ。よくボールを回しCF竹野を中心にした得意の速攻が生きていた。しかしここで同点に追いつけなかったのが、後半の五分の戦もフイになる結果になった。

◇―ルーマニアは前半21分早いパス・アウトから中央にボールを出しLWブルガル。LIナトの強引なシュートで点差をつけ、全日体大の守備陣をカク乱するとともに連続的にポイントをあげて11―5前半をリードした。勝負どころを巧くついて全日体大を引き離したのはさすがだった。後半は全日体大はスタミナの消耗があってややよく食い下ったが、前半の終りの動きがにぶくなったが、それでも守備の崩れが最後までたたってしまった。全日体はルーマニアの脚力に劣らない程競り合ったが、シュート力の差が総べてを左右していた。

技術評

松本　重雄
（教大OB・協会理事・第三戦主審）

全日体大はこれまでの日本チームの試合ぶりを活かして研究のあとの見える試合ぶりだった。殊にパックス第一線マン、ツウ、マン第二線ゾーンと変化をつけたディフエンスを布き、第一線が早いつぶしを見せて、とも角もルーマニアの出足を食い止めたのが善戦の原因だ。しかし、ルーマニアは流石に試合の展開力を心得ており、前半の20分すぎから速攻、遅攻と巧みなチエンジ・オブ・ペースで攻撃を行い、全日体大守備陣をまどわす策戦に出たあたりは上手かった。しかし、結局はルーマニアがハーフタイムアップ前十分間に殆んど速度の落ちないスピードを見せるのに対し、全日体はやはり、取られたら取り返すと云う気力は見えても波状的な攻撃を仕掛けるには体力的にムリであった。日本チームが勝利を得るにはテクニックの面ではヒケをとらないものがあるのだから、スタミナの配分が今後、問題になって来よう。結果的には、ここの10分間の失点が敗戦につながったワケである。しかし、仮に全日本チームを編成したとしても、今日ぐらいの差は仕方がない。つまっても一、二点差、それだけに全日体大の試合ぶりを賞してよい。ルーマニアはブルガルがマークされるとコスタケやナトがかせぎまくると云ったように、やはり秀れた個人技の上に立って綜合力は見事である。

ハンドボール豆辞典

ハンドボール競技のセンターとも云うべき各機関の創立年は次の通りである。▽国際ハンドボール連盟（IHF）一九二八年、▽日本ハンドボール協会（JHA）一九三八年、▽全日本学生ハンドボール連盟一九五八年、▽全国高等学校体育連盟ハンドボール部一九五〇年

国際試合余滴

○…ルーマニア・チームのユニホームはブルーと白の二つ、白の時はショートパンツがまっ赤で、その対照が鮮かだ。目を引くのは全員がノーストッキングなこと。日本ではストーキングをはくのが慣例だが、日本より短かめのショートパンツから出ているその長い足はストッキングがないために、よけい軽快、日本でもストッキング返上のチームがこれからは出て来よう。

○…一行の東京の宿舎となったのは、国立競技場の中にあるスポーツマンホテル。十七日の夜は国立競技場でサッカーの早慶ナイターがあったため三々五々スタンドに上って観戦していたが、ルーマニアでもボールゲームはほとんどナイターをやっているそうで、ハンドボールとサッカーが人気の双壁だと云う。

○…第二戦の中大戦のハーフタイムに中大の舞踊研究会が趣向をこらしたコスチュームでフォークダンスを披露した。ハーフタイムにアトラクションをやるのは最近のスポーツ界のビッグゲームの一つの流行だが、ことに中大戦は中大側が色々の心ずかいを見せてルーマニア選手の送迎などにも気を配っていたのは気持のよい〝演出〟であった。

○…その中大戦の入場式で中大選手が揃って見馴れない黒いジャンパー（?）を着ている。オヤと思っているうちに、中大選手がそれを脱いでルーマニア選手に着せた。黒いジャンパーと見せたのは、実は記念に送るハンテンだったのだ。この珍しい送り物にルーマニア選手はすっかり大喜び。国際試合らしい和やかな雰囲気だった。

○…ルーマニアチームが予定より五日も遅れたため十二日の対全早大戦も日程が変更されたが、十二日は皮肉にも快晴無風のスポーツ日和。延期を知らないファンが五百人ぐらい（小石川グラウンド事務所の話）集って延期の告示にしぶしぶ引き上げて行った。



中大の小兵FW大脇健闘するもFBマルクにつぶさる（全中 大戦より）

第4戦

抜群の試合展開力

対全群馬 前半で勝負を決す

来日第四戦、対全群馬との試合は、六月二十二日午後二時五分から群馬県桐生市新川球場で約一万六千の観衆を集め、主審徳永（日体大OB）で開始

ルーマニア 24（12—5、12—6）11 全群馬

【全群馬】		S	得
GK	伊崎	0	0
FB	深山	1	0
	赤石	0	0
HB	楼井	0	0
	小田	0	0
	中里	0	0
FW	中島	2	1
	金子善	6	3
	小林	11	4
	金子浩	4	0
	岸	6	2
代補	都丸	3	1
	高橋	0	0
KMT	2	33	11

【ル軍】		得	S
GK	レドル	0	0
FB	バレスク	0	0
	マルク	1	2
HB	イリエスク	0	0
	ニテスク	0	0
	K・セラル	0	1
FW	バラシュ	4	4
	オテリヤ	4	7
	ナデア	4	5
	コスタケ兄	2	4
	ナト	6	9
交代	ブルガル	3	4
GK	カベルプッシュ	0	0
KMT	0	24	35

後記と技術評　小川励行（デイリースポーツ東京本社運動部）

鉄道ストのため、この朝、バスで東京を経った一行は、必ずしもコンディションはよくなかったが、秀れた脚力、シュート力を利して全群馬のあまいディフェンスを自由に突破してCFナデア、RIナトらの見事なシュートで着々と得点を重ねて、前半12—5と大勢を決してしまった。ルーマニアはこの日エースブルガルをベンチに下げる余裕を残し若い選手を登用したが、流石に、早いパス・アウトから速攻をかけ、さらにゴール前での変化に富んだパスワークは全群馬につけ入るスキを与えない鮮かなものだった。全群馬もよくボールをキープしては小林、両金子のセンタースリーに積極的に射たせたが、前半で体力差が表われてはどうしようもなかった。前半15分3—5としたまでが試合。ルーマニアチームはこれで来日以来四連勝を飾ったわけだが、ルーマニアチームのフォーメーションは日本とそう差のあるものではない。ただ日本選手とは比較にならないその長身を利してのシュートのコントロールの良さ、加えて、両サイド45度におけるシュートの確率のよさが、有力な武器となっている。この差が、つねに勝敗を左右しているわけなのだが、日本選手にも要求されるのはシュートミスを少なくすること、例えば、この日の試合でもルーマニアは36本のシュートのうち24本をゴールに結びつけており、同数近いシュートを全群馬は放ちながら、得点は半分に満たない。GKの動きをみて、自由にコーナーを狙えるシュート力を身につけるべきであろう。また、スタミナの配分と云うこともルーマニアは実によく消化しており、相手の疲れに乗じて波状的なラッシュ攻法をかけ連続得点を奪う試合展開力は世界のトップレベルにあるチームの貫録十分である。この日も後半20分までに連続7点をあげた攻撃力など感嘆のほかはない。

第5戦

全愛知の速攻むなし

10—7 後半ル軍を初めてリード

ルーマニアチームの来日第五戦対全愛知の試合は六月二十五日、名古屋市の瑞穂競技場で、観衆約二万を集めて主審宇津野年一氏（日体大OB）鈴木㈣鈴木㈢三氏審判で開始。

ルーマニア選抜軍 23（16—5、7—10）15 全愛知

【全愛知】		S	得
GK	清水	0	0
FB	堀	0	0
	森川	0	0
HB	宇津野	0	0
	斉藤	0	0
	豊島	0	0
FW	牧野	6	0
	服部	7	3
	羽上田	7	4
	浅野	7	1
	高村	15	7
代補	近藤	2	0
GK	山田	0	0
MT	0	44	15

【ル軍】		S	得
GK	カベルプッシュ	0	0
FB	バレスク	1	1
	マルク	0	0
HB	イリエスク	1	0
	ニテスク	0	0
	V・セラル	4	2
FW	コスタケ弟	8	3
	オテリア	0	0
	ナデア	2	4
	ナト	9	6
	ブルガル	16	8
交代	コバッシュ	2	1
GK	レドル	0	0
MT	14　2	45	23

後記　鷲尾武治（共同通信社運動部）

全愛知は名門楼丘会が主力メンバー。このなかにはことし芝浦工大を出た服部をはじめ第一戦に出場した早大の山田、ベテランの浅野、高村、さらに羽上田、森川の新鋭がいる。したがって、全愛知に寄せる期待は大きかった。あるいはルーマニアにひと泡吹かせるのではないかと心ひそかに念じたのだが……。合宿練習の実がそのまま現われたら、かなりいいゲームになることを疑わなかった。ただ気がかりだったのはクラブ・チーム、つまり寄り合い世帯の点だけだった。ゲームは前半16—5とルーマニアのワン・サイドに終った。これがすべてである。後半全愛知の善戦は実にすばらしかった。それだけになぜもっと早くこうできなかったのか。前半25秒羽上田がうまく持ち込んで左スミに先制のシュートを放ったがカベルプッシュにうまくはばまれた。1分25秒に高村がゴール前のルーズからうまく左サイドに抜けて右スミ先制点を決めた。このときの左サイドはノーマーク、激しいローリング・パスの現われだった。4分にブルガルがFTを受けて右スミに強引なシュート、これでスコアは1—1となった。このころからルーマニアは愛知の両サイド

を激しく攻めたてた。ルーマニアFWは徐々にスピードを増し大きなフェントで愛知のバックスをうまくおびきよせ、そのスキをねらって連続シュート、前半15分で8—3とリードした。愛知のバックスはブルガルをマークしたが体が小さいため振り回されるハメとなった。それぼかりでなく速攻を身上とする愛知FWのスピードは全くなく見るかげもなかった。ゲームは完全に前半であっさり決まった。後半に入ると、愛知のプレーは見違えるようなスピードを見せた。3分45秒羽上田が右サイドから左スミにシュートして先行した。ボールを高村、羽上田に集めて打たせた策戦が成功、高村が6分30秒、8分、12分と連続ゴールして4—2と差をつけた。ルーマニアは前半の大量点で気楽にゲームを運んだのだろうが愛知FWの速攻はすばらしかった。低い姿勢から確実なパス、その後浅野、羽上田が低めのシュートに成功し24分30秒には8—4と引き離した。後半は全く愛知のペースだったが、前半にFWの速攻さえあればもっと接戦していただろう。後半愛知のシュート成功率は約五割。（シュート22、得点10）

技術評

高島 冽（日本ハンドボール協会理事長）

西ドイツとの時も楼丘会を主力にした全愛知は好試合を展開したが、この日も滑り出しはル軍FWによく対抗して互角の試合ぶりを見せた。しかし、時間の経過とともにル軍の一人々々の柔軟な身のこなし、多採なパスワークに点差を開かれ、善戦が精一杯であった。ル軍は相変らずリターンパスや大きなフェイントを交えたローリング、オフェンスで、ふところ深く飛び込む全愛知の防禦陣をふり払い、特に前半15分頃から見せた速攻とフリースローライン手前からジャンプシュートは殆ど全愛知GKに動く間（マ）を与えぬ鋭いものであった。前半30分を同じ速度で走り貫くスタミナは素晴しい。一方の全愛知も最後まで試合を捨てず、殊に後半は斗志を導い立ててよく走り好プレーを見せた日本チームにしては秀れた体力を備えながら、ル軍のスピードに圧倒されたのは今後に残る課題であろう。なおル軍は、前半、大量リードに余裕を見せたのか、珍しくも五人防禦を見せたが、広いリーチを活かしての中央一線防禦は六人の時と殆ど変らない。全愛知の動きは非常によかったのだが、結局は〃体格差〃……特に〃腕力差〃と云うことになろうか——

全関学、互角の挑戦……

クンスト氏、厳格な審判ぶり 斗志あふれた好技を応酬

第6戦

ルーマニア・チームの来日第六戦、対全関学戦は六月二十六日二時十分から西宮球技場で三千の観衆を集め、主審I・クンスト氏（国際公認審判員・ルーマニア）副審狩野、光島三氏審判で開始

ルーマニア選抜軍 19（9—4 / 10—7）11 全関学

得	S	【ル選抜軍】		【全関学】	S	得
0	0	レドル	GK	小河	0	0
0	0	イリエスク	FB	八田	0	0
0	0	バレクス	FB	山淵	0	0
1	1	コバッシュ	HB	安部	0	0
0	0	K・セラル	HB	富川	0	0
0	1	V・セラル	HB	藤原	0	0
2	2	バララシュ	FW	日向	9	2
1	5	コスタケ弟	FW	市場	3	2
2	2	コスタケ兄	FW	村中	12	3
5	8	ナトル	FW	深江	6	2
8	10	ブルガル	FW	今西	4	2
0	1	マルク	交代	宮地	0	0
0	0	カベルプッシュ	GK補			
19	30	3	14M投	2	34	11

技術評

村田 弘（日体大OB・大阪三国丘高監督）

さすがにル軍は転戦の疲れが出たか、その本領たるエネルギッシュな攻防が鈍って見えた。しかし、ブルガル、ナトらの見せたシュートをする際に上体を左に振りながら（或いは右に）シュートは右に（或いは左に）放つプレーや瞬間ダッシュの鋭さは、全関学の及ぶところではなかった。全関学が前半をとも角も10点以下に食い止めたのはフリースローラインを軸にしてのマン・ツー・マン防禦の成功と、マイ・ボールを慎重にキープして、時間をかけて攻めたからであろう。また、攻撃もやたらにル軍の速いペースに合わさず、自分のペースで試合をしたのは賢明で、ル軍の戦法をよく呑みこんだベンチ・ワークの巧さと云える。だが、体が大きく、ドリブルの多い攻撃は、体が大きく、リーチのあるル軍のディフエンスには一寸通じない。後半、見せたようなオープン攻法を積極的に用いていたなら、かなり肉薄出来たのではなかろうか。ル軍のFWは個人の突進力に長けており、密集をついて、ともかくシュート態勢にまで持って行くことは、旺盛なファイトの所産であり、これは見習はなくてはいけないだろう。クンスト審判のジャッジは、犯された反則がゲームの展開にどう影響するかと云うことが判定の材料になっていたようで、なかなか厳しいように見えた。しかし後半五分、八田が退場を命ぜられたプレーは解せない。日本なら14米を科して退場には処さない。

国際試合もすでに六試合を終ったが、やはり体格の差が大きい。具体的には腕力、肩力、手首の強さと云うことになろう。日本チームは、そうした基本的な問題の強化と共に日本スタイルのプレーを考案すべきではなかろうか。

次号予告

九月下旬発売

▽国際試合回顧特集
。対全北海道、全仙台、全神奈川、全芝工大戦観戦記
。ルーマニアに学んだもの（座談会）
。ルーマニアのプレーを解剖する。その他
▽全日本総合選手権回顧
▽全日本学生選手権総評
▽全日本高校選手権熱斗譜
▽全日本教職員選手権を終って
▽東西学生秋季リーグの話題を探る等の他国体展望

クンスト監督に聞く

シュート力の養成が第一

選抜軍なら西欧と対等

審判技術は最高

ルーマニアチームの役員や選手に日本のハンドボール界や日本の選手はどう映じたろう。ルーマニア全選手にアンケートを求めようとした編集部の企画は彼らの多忙な日程と言葉の通わぬ障害にあって本号では果せなかった。そこでホテルのロビーやグラウンド、あるいは到着時の記者会見などで一行の監督であり国際審判員のイオン・クンスト氏に聞いた話をとりまとめてみることにした。

※

——日本のハンド・ボールの実力について

個々には非常に秀れたプレイヤーがいる。全早大の吉田正、長沢恵谷、全中大の大脇、全日体大の竹野、栗山、井上らがこれまで（六月二十日現在）対戦したチームでは印象に残った好選手だ。

——チーム力はどうか

ベスト・イレブンを揃えることは大変難しい。私もチーム作りにはとても苦労している。日本チームは一人一人には優秀な選手がいるが、十一人揃って優秀とは云えない。しかし、ヨーロッパのハンドボール界は十一人総てが文句のない選手を揃えていないとAクラスには並べない。日本はその点で少々力不足だと思う。

——来日途中カントンで試合をしたそうだが中共と日本のレベルは

カントンの試合は公式なものではなくトレイニングゲームだった。カントンの選抜軍と地元の陸軍の試合をしたが、日本の実力なら選抜チームをつくれば攻守にカントンを上廻るだろう。

——さきほど印象に残ったと云われる選手は皆、FWだがバックスの選手はどうか

バックスは文句なく全日体大がこれまででは一番よかった。

——日本のハンドボール界の最大の欠点は何と感じられるか。まずFWでは——

シュート力の非力が目立っている。パスワーク、ハンドリング、それにランニングも決して悪くはない。しかしゴールにつながるシュートが弱すぎる。

——バックスの面では

我々の体が大きいせいか知らぬがホールディングで攻撃をストップさせようとするのが一番いけない。FWを故意につかまえるのは試合をつまらなくする。しかし、ボディによるデイフェンス、つまりボディチェックはもっとやるべきではないか。

——GKは

GKは相手のシュートを止めるだけではない。味方の攻撃のきっかけは大ていの場合、GKからのパスで始まる。日本のGKはそうした点に難がある。速攻のきっかけはGKがつくると云ってもよいだろう。ストップしたボールは素早く処理すべきだ。

——レフエリーについて

これはもう全然文句はない。その技術は非常に秀れており、国際舞台に出しても決して恥ずかしくはない。始めは、そのゼスチュアが少し大きいように思えたが、これは我々がそうしたことに不馴れだったからだろう。

——日本チームのよい所を何か感じられたか

チームワークのとれたプレーをするのはよいことだ。こうした特長は全日本代表軍を作った時にも発揮すべきであり、そうすれば我々や、他のヨーロッパ・ハンドボール界と対等な試合が出来るだろう。

——日本チームが伸びて行くにはどうしたらよいだろう

高島理事長とも話をしたことだが、我々と日本のチームには肉体的な開きがかなりある。だから我々のプレーをそっくりそのまま受け入れることは必ずしも良策ではない。しかし、スタミナの養成とロングシュートを射てる選手が出て来るように心がけなければ、良い試合は出来ても我々から勝利を望むのはムリなのではないだろうか。しかし、日本チームの研究心には敬意を表したい。わずか二試合の経験で第三戦にあたった全日体大は我々をてこずらせるような策戦を考え、そのディフェンスはずばぬけて上手かった。日本のハンドボール界のレベルの向上は将来、大いに期待出来る。

——バックスの陣型に特色があるが、ヨーロッパでは各チームともあのようなものか

ルーマニアチームの場合は中央部を守るHB陣の強さに自信があるからで、また、相手の速攻を止めるには、なるべくライン（35米ライン）に近ずいていなければまずい。ゾーンとマン・ツウ・マンのスイッチも楽だし常用している

しかし日本の大脇（全中大）や栗山（全日体大）が見せたような二つのラインをえぐるようなカットインのプレーには3・2のオーソドックなスタイルだ。（注、二つのラインとはおそらくフリースローラインとゴールラインのことを指すのだろう）

——もし、あなたの相手チームにブルガル選手が居たらどうして防ぐか

（笑いながら）それは全日体大の荒川監督に聞いた方がより確かだろう。

——マン・ツウ・マンか

おそらくそうするだろう。

——日本チームは国際舞台に立ってどの程度やれるか

やってみないと判らないが、全日体大などは学生主体のチームとしてかなり強い。選抜軍なら対等に試合出来るだろう。しかし、それは前に云ったようなシュート力とスタミナを完成してからの話だ

——来日前予想していた日本チームと実際とはどうか

我々は日本のハンドボールについて殆ど何も知らないで来た。

——その他、日本のハンドボール界について

ヨーロッパではハンドボールには大変な数のファンが集る。その点、日本はさびしいものがある。

国際試合の歴史

昭和十三年に第一回（H・ユーゲント対日体）

昭和31年 西ドイツには8戦8敗

世界第二位 ルーマニアチームの試合ぶりは全国各地で、改めてその技術の高さを示しているが、定評通りの強さをうなずかせ、一方日本側チームの実力も、西ドイツ来日当時とは比べものにならぬくらい向上している。日本に於ける正式な国際試合はこれが五回目で、その戦いの跡を、ここで集録しておこう。

▼第一回 ヒットラー・ユーゲント対日本（日体）＝昭和13年9月16日 神宮競技場

日本（日体）16（8－5、8－4）9 H・ユーゲント

▼第二回 在日ドイツ選抜軍対日本（日体）第一戦＝昭和15年6月9日 神宮競技場

日本（日体）8（4－5、4－0）5 在日ドイツ人選抜

▽同第二戦＝昭和15年6月16日 奈良橿原競技場

日本（日体）8（3－1、5－4）5 在日ドイツ人選抜

（以上二試合は紀元二千六百年奉祝東亜競技大会の一環として行はれた）

▼第三回 訪日ドイツ艦隊対全日本学生＝昭和17年11月29日、神宮競技場

全日本学生 8（4－4、4－3）7 訪日ドイツ艦隊（独）

【日本】
GK 島田（日体）
FB 川村（日体）、若崎（日体）
HB 荒川（日体）、北川（日体）、有元（慶大）
FW 高橋（日体）、島田（慶大）、高島（日体）、宮崎（早大）、林（早大）

【ドイツ艦隊】
GK モッサネル
FB ハンゼ、フィンク
HB マッテルン、オーエミシェン、ゾッフ
FW ノイラッハ、バッセルロス、ベルンスタイル、ヘンペル、マルティエウス

（日本で国際試合のため選抜軍を編成したのはこの試合が最初）

来日ルーマニア・チーム メンバ

（円内数字は年齢）

団長 ヴアシレ・ツードル ㊴
役員 アウリカ・カンペアヌ ㉛、ゲョルゲ・サベスク ㊲
監督 イオン・クンスト ㉟
GK ミカイ・レドル ㉔、ルドルフ・カベルプッシュ ㉛
FB・HB バレンチン・セラル ㉚、コンスタンチン・セラル ㉖、オクタビアン・ニテスク ㉘、サビン・マルク ㉖、イオン・イリエスク ㉑、ギョルゲ・コバッシュ ㉖、ジョルジェ・バレスク ㉔
FW オリンピュ・ナデア ㉔、コルネル・オテリヤ ⑲、ビルジール・ナト ㉔、アルパッティ・バラシュ ㉑、ミルカ・コスタケ（兄）㉔、ミルカ・コスタケ（弟）⑳、アウレル・ブルガル㉕＝主将

▼第四回＝西ドイツオールスターズ対日本国際親善第一戦＝昭和31年9月16日 横浜平和球場

全日本学生選抜軍 19（8－3、11－5）8 西独選抜軍

【全学生】
GK 加藤（日体）
FB 高森（芝浦）、竹尾（明治）
HB 小鳥井（日体）、堀（日体）、伊藤（立教）
FW 中上（芝浦）、丸岡（日体）、近藤（芝浦）、森（日体）、竹野（日体）
渡部（教大）
交代 今野（芝浦）
GK補

【ドイツ】
GK ネレン
FB ベルンハルト、ルッフ
HB ティーマン、ギュンネマン、ケスラー
FW スターラー、H・ヴィル、ケンパ、ダーリンガー、シュヴェンガー

▽＝同第二戦＝昭和31年9月18日＝名古屋瑞穂ラグビー場

西独選抜軍 24（13－7、11－6）13 全東海

▽同第三戦＝昭和31年9月20日 富山球場

西独選抜軍 21（10－4、11－5）9 富山クラブ

▽同第四戦＝昭和31年9月23日 大阪球場

西独選抜軍 27（12－7、15－9）16 全日本

【日本】
GK 光島（日体出）
FB 天野（日体出）、桜井（芝浦出）
HB 平地（教大出）、山本（日体出）、中出（日体出）
FW 小林（芝浦出）、柳沢（日体出）、浅野（日体出）、村田（日体出）、皆川（日体出）
交代 高山（日体出）
GK補 小野（日体出）

【ドイツ】
GK シンゲル
FB ブルンハルト、ティーマン
HB ケスラー、ルッフ、ギュンネマン
FW ヴァンケ、H・ヴィル、ケンパ、ステーラー、シェッドリッヒ

▽同第五戦＝昭和31年9月24日・八幡市大谷球場

西独選抜軍 22（12－3、10－3）6 全九州

▽同第六戦＝昭和31年9月25日・山口県宇部球場

西独選抜軍 14（8－2、6－3）5 全山口

▽同第七戦＝昭和31年9月28日・山梨県甲府グラウンド

西独選抜軍 18（8－3、10－7）10 関東学生連合

▽同第八戦＝昭和31年9月30日・後楽園競輪場

【全日本】
GK 星野（教大出）
FB 遠藤（教大出）、桜井（芝浦出）
HB 斉藤（日体出）、山本（日体出）、平地（教大出）
FW 幸田（日体出）、新村（教大出）、浅野（日体出）、皆川（日体出）、佐野（教大出）
交代
GK 補小野（日体出）

【ドイツ】
GK ネレン
FB ベルンハルト、ティーマン
HB ケスラー、ルッフ、ギュンネマン
FW シュヴェンガー、H・ヴィル、ケンパ、ダーリンガー、シェドリッヒ
R・ヴィル

（注）この他に戦前、慶大、早大などが在日ドイツ人選抜、横浜クラブ（独）等と試合をしている。

芝工大・30連勝を記録

昨年七月一日第二回全日本学生選手権で同志社大を破って以来連勝を続けている芝浦工大は既報のごとく今シーズンに入っても春の関東学生リーグで勝続け、更に明大、早大、中大、日体大等を破って六月末日現在遂に30連勝を遂げた。昨年以来10点以下に得点が終ったのは昨秋の中大戦（9対7）と今春の慶大戦（7対6）だけで得点力の強力さがこの記録を作ったことを物語っている。

特集

ルーマニアに学ぶ

=国際試合の教えるもの=



FWコスタケ弟の見事なジャンプ・シュートぶり
右はFB井（全中大戦前半26分）

ルーマニアとの国際試合を前にして、日本側の協会関係者や対戦チームの監督、コーチ連の鼻息はかなり荒かった。勝てないまでも五点差ぐらいの試合が多いだろうし、二つぐらいは勝てるかも知れない――そのような声も聞かれたのである。しかし、日本側のルーマニアに対する資料はほとんど無に等しかった。世界選手権決勝のフィルム、それと現地から送られて来た記録が頼りであった。もち論、その戦法も、選手の身長、体重さえも一行が到着しなければ判らなかった。にも拘らず、何を根拠に日本側関係者が、ルーマニアに勝てそうだと云ったのだろうか。――それは昭和三十一年秋来日した西ドイツと対戦した経験が日本その後非常な刺激となって、日本ハンドボール界の全般的なレベルが向上したと云う「自信」が総てであった。たしかに日本ハンドボール界のここ二、三年のレベルの向上は注目すべきものがある。しかし、それはあくまで「ハンドボールが判りかけた」程度なのであって、向上は向上でも国内的視野においてであり、国際的には果して関係者の強気どおりに受けとってよいかは疑問であった。果して、ルーマニアチームはその強引なプレーを駆使したスケールの大きいハンドボールで日本チームを殆ど問題にしていない。しかし乍ら、来日第一戦の対全早大戦を終ったあとでさえも、関係者の大半は、「充分、日本チームのつけ入るスキのあるチームだ」と口を揃えて云っていた。「たいしたことはない」と云うその口裏には、自分達が期待していたチームと大分違うと云う意味なのか、我がチームに比べてもたいしたことはないと云う意味なのか、それとも西ドイツに比べてたいしたことはないと云う意味なのか判らない。おそらくは、その何れもであっただろう。NHKラジオ解説者の大久保静男（慶大OB）氏は云う「たしかに、新しく取り入れべるきプレーは少ない。しかし、日本選手が知っていながら実行していないプレーや基本的に見習うべきプレーは実に沢山あった」と。ではその見習うべきプレーとは何だろう。高島協会理事長、渡辺関学監督、荒川日体大監督などの言葉をまとめてみるならば「それは基礎に忠実な教科書通りのプレーをすると云うことだ。例えば第一戦は雨だった。すでに彼らは雨天攻撃の常とう手段と云われるドリブルを多用しない。タテの攻撃を多くする。個々のキープ時間をなるべく少くすると云ったプレーを全員がごく当然に行なう。ぬかるんだボールを確実に捕るために忠実なボディキャッチをする。フリーボールに対してはまっしぐらにボールに向ってダッシュする。つまり我々が日頃最初に教えられて来たり、教へて来たプレーを、彼らは忠実に繰り返しているのだ」と云うことになる。高島理事長は更に「ルールを最大限に利用している。その証拠には常に六人攻撃、六人守備である。おそらくヨーロッパのハンドボール界は総てこの戦法だろう。六人攻撃（あるいは六人守備）と云うのを一つの戦法であり、策戦であるとしているのは日本だけかも知れない」とも云う。

こう、話をまとめて来ると確かにルーマニアは目新しいハンドボールをお土産に持って来てはくれなかったようだ。だからと云ってルーマニアを評して「たいしたことはない」と云い切れるだろうか。荒川氏は全中大戦を見ながらこう云った。「ズバリ、実力の差は格段だヨ」と。また松本重夫氏（協会理事、第三戦主審）は「西ドイツの来日で、日本のハンドボール界は改めて真のハンドボールを見もし、教わりもした。それまでの日本のハンドボールはドリブルボールであった。それを西ドイツとの試合でパスプレーを主とした試合展開を覚え、今は丁度、そうしたプレーを完成する過渡期にあり伸び上る前の低迷と云うことも出来よう」と日本の実力の低さを認めながらその原因をこう説明している。しかし中にはある大学の一先輩のように「ルーマニアと良い試合が出来ないのは一にも二にも基礎技術の差であり、基本プレーに忠実でないからだ。表面だけのプレーを採り上げてルーマニアから得る所が少ないなどと云っているようでは何時まで経ってもレベルの向上など望めない。なまじっか一勝や二勝をあげるのは、これからの日本のハンドボール界の真の充実と云うことから考えれば仇になる因の方が多い」というきびしい批判もある。

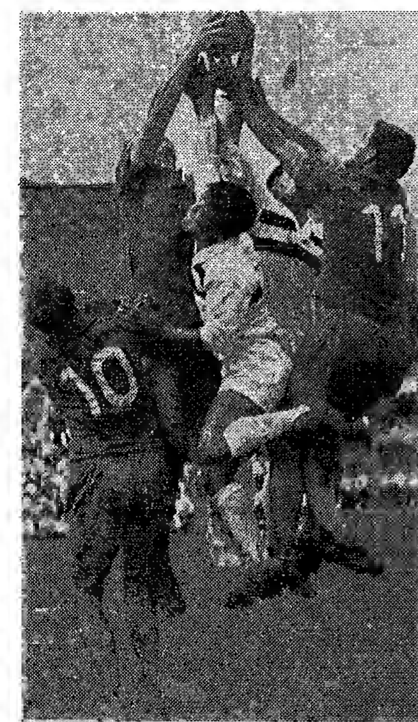
体力の差が歴然

西ドイツが来日した時、日本側は八戦八敗彼我の差をまざまざと見せつけられ、八試合の総失点一七三、一試合平均二一・六の得点を奪われた。一方、得点の方は八試合で七九点、一試合平均十点弱と云う記録が残されており、数字の上からはこの四年間日本チームはたいした進歩をしていない。もっともルールの大巾な改訂もあり西ドイツの時は対戦チームの総てがピックアップチームであり、今回のように単独チーム中心の日程編成ではなかっただけに、実質的には僅かながら、その進境を認めてよいものがあろう。ルーマニアチームの特色はFW面ではドリブルを用いた大きなフェイントによる突進と、波状的なそのラッシュ攻撃にある。その点ではち密なパスプレーとゴール前のローリングオフェンスに洗練されたチームプレーを見せた西ドイツの攻洗とは大分趣を異にしている。それだけに豪放味はルーマニアの方が幾分上の印象をうけるのだが、逆に日本チームの関係者がルーマニアチームを「ラフなチームだ」と評するのもここらあたりに原因があるのだろう。また、ルーマニアのそうした攻撃法は日本のFWが学びとるには体格的にも、体力的にも不向きであると云うことも出来よう。彼らのパス・アンド・ダッシュはその天賦のストライドとその体力をフルに活用した肩力（遠投力）が後立てとなっているからである。彼ら程度の体格があって始めて、あの豪快味が生れ、チームの一つの特長にまでつながるのである。その点では、ソフトボールのようにボールを扱うシングルハンドリングなどはどうしてもマネの出来ないプレーの一つであり、仮にそれを採り入れたとしても完全に消化するプレイヤーやチームは一朝一夕にして生れないだろう。それでは具体的に、ルーマニアチームから何を学ぶか。日本のチームの体力の差、体格差を考えてまずおいつくことの難しい点は、①歩巾のあるストライド②シングルハンドリング③上背を利したハイ・パスと云った点であろう。これらのことは〃日本人〃と云う先天的な体質が改まらない限り、日本選手や日本チームに採り入れることは難しい。しかしこの問題にしても荒川氏が云うように『体力の違いを言いわけにしていては日本人は、国際試合（特にボールゲームでは）には常にハンディキャップを負うことになる』し一方、山岡二郎氏（東京協会理事）の云うように『先天的な体格差は仕方がない。むしろ国際試合を多く経験することによって、日本流のハンドボール、つまり日本戦法をあみ出すべきだ』と云う相反する見方も生れてくる。だが、東京での序盤三戦を経験した萩原全早大監督、桑原全中大監督、荒川日体大監督らは「食い込む余地の全くないチームではない。全芝工大や全日体大などのパス・ワークの方が上手いとさえ思うほどだ。技術面だけを云えば決して劣っていない」と云う。ではこの三チームが何故勝てなかったか。イオン・クンストルーマニア監督はただ一言「ロングシュートが打てないからサ」と云い、荒川氏は「スタミナの問題だ。体力と云うのは先天的なものでは決してない。練習で鍛えあげることは可能なハズだ。早稲田にしても、中央にしても、前半の30分間さえ対等に走り切れなかったではないか」と云う。つまり、ルーマニアから学ぶ最大の課題は「秀れた体力の養成とスタミナの配分研究」であり、それによって始めてスピードのあるハンドボールが出来ると云うことであると云ってもよいだろう。

圧巻!! スピーディな攻防

ところで、日本チームはルーマニアから点を取るのに苦労した。攻撃は最大の防禦であり勝利への直結は〃得点〃をおいて他にない。ルーマニアの守備陣型は変則的だった。いわゆるW型でもM型でもU型でもない。六人の守備陣がフリースローラインの一、二歩前に一二米の間隔で半円形を描いて立並ぶような感じであった。そしてマン・ツー・マンとゾーンの併用である。日本チームがこの守備陣に対して苦労したのは、そのリーチの長いことと、相手の上背が非常に高かったことの二点であろう。しかし、見逃してはならないのは中沢重夫氏（芝工大コーチ）の云う「GKとバックスの連けい守備の完ぺきさ」にあるのではないか従来、日本のハンドボール界でも、バックスとGKとの連けい守備はうるさくは云われているが、そうしたインサイドワークはゴール前のフリースローの時には用いられたが、試合中のプレーではなかなか実行されていなかった。ルーマニアチームのディフェンスを見て、この連けい守備の上手さが非常に目につく。しかも高島氏が云うように「GKカベルプッシュの個人技はルーマニアディフェンスの大黒柱的存在だ。一米八十以上の長身ながらセービングで見せた弾力性、スタートの早さはとうてい日本のGKの及ばぬ所だ」と云うようにGKのフライングストップが申し分ない。最終防禦線の強さではまずルーマニアは完璧だった。それにも拘らず日本チームが非力な体力を顧りみず、やたらに個人の突進力に頼ったチームが多かったのは無策すぎた。

× × × ×



レフエリースローからボールの奪い合い、ジャンプ力は同等だが身長の差がはっきり表われている。

ビールにつられて定期戦

=楽 書 帳= 第2回

鷲 尾 武 治

ハンドボールも外国チームの来日で株の値段が少しづつでも上がってきた。終戦直後のことを思えば、まさに″月とスッポン″の差がある。あの当時はサツマイモをかじり、青白い顔でボールを追いかけていた。会長は式場先生、理事長は慶大OBの外山さん、いま協会の理事をやっている松本君（教大OB）はレギュラーとして名CFぶりをみせていた。松本君とは中学（元府立七中、現墨田川高）が同じだった関係で急にハンドボールに興味を感じた。わたしがハンドボールに足を突っ込んだのは松本君の影響が大きい。それにいま理事長をやっている高島さん（日体大OB）がシロウトのわたしにハンドボールのことをくわしく教えてくれた。徳永さん、岩崎さん（早大OB）とも親しくなった。だれでも簡単にできるスポーツ……それが私に愛着を持たせた最大の理由でもある。

⑪……終戦直後のハンドボールは多事多難だった。協会のお歴々はマスコミに対して積極的に働きかけた。二十二、三年ごろだったと思う。協会が音頭をとって文部省、協会、東京運動記者クラブの対抗戦をやることになった。それで記者クラブの方も正規の十一人を集めにかかったが、当時の状況では半数の六人を集めるのに苦労したものだ。それでわたしは我が社の記者をうまく口説いて四人集め、朝日新聞からも立大野球部の先輩である好村さんもご出馬願った。協会はこの対抗戦を毎年十二月に開きたい意向だったのでOKした。

⑪……ただ試合をやるだけではなかなか集まりそうもないので協会はチエをしぼった。当時は食糧難、ここに目をつけた。「試合終了後に懇親会を開く。ビールとサツマイモを用意してあります」……これが意外に反響を呼んで「ビールが飲めるのか？」「サツマイモはステキ」とか勝手なことをいいながら集った。″大成功″と会場は当時の文理大、または第一師範、とにかく対抗戦はスムーズに運んだ。毎年この試合を楽しみにしていたものだ。いまにして思えばなつかしい時代だった。″ハンドボール、ビール、サツマイモ″……この組み合わせは落語の三題ばなしそのものである。平和な時代のいまでは、とてもサツマイモなんか食ってはいられない。サツマイモのありがたさはいまでも忘れられない。

⑪……そのころから高島さんとは兄弟のように仲よくなった。彼が結婚した直後、わたしと当時日刊スポーツ社の本沢君と二人で新婚ホヤホヤの高島邸（？）を訪れ、いきなり戸棚をあけてウイスキーを引っ張り出し酔いつぶれて泊り込んだことがあった。花ムコ、花ヨメさんには気の毒だった。いまでもときどきこの話が出て高島さんと腹をかかえて笑うことがある。東映のベテラン″市川右太衛門″によく似ているところから、わたしたちの仲間では″ニセの右太衛門″とニックネームをつけた。ハンドボールへの思い出はつきない。

（筆者は共同通信社運動部記者）

時 評

ル軍台風で香港に足止め

=予定の狂った滞日日程=

国際試合開催に大きな教訓

ルーマニア・ハンドボールチームは六月十五日午後五時十分、その元気な姿を羽田空港に見せたが、この到着は当初予定の六月十日より丸五日遅れたものだった。六月十日から二日間香港を襲った台風三号のため、その足を止められたことと、香港に入るビザ（入国査証）の手続き遅滞が原因なのだが、このため日本ハンドボール協会は日程の変更その他テンヤワンヤの大騒動となり、国際試合ではかってこのような前例がないだけに報道関係者も珍例とばかりに、十五日の記者会見でも、足止めの理由が質問の第一声にされたほどだった。来日延着で一番の被害をこうむったのは第一戦に当った全早大で、予定通り行けば来朝第一戦しかも日曜日だけに興行的にも充分採算のつく見通しがあっただけに、この日延べは痛く、しかも延びた十六日は朝から折悪しく雨天。日程さえつまっていなければとても試合など出来るコンディションではなかった。観客席も閑散そのもので、ある早大の先輩は「四十万円近い赤字です」と云う。

ルーマニアチームが入国査証をしっかりしておきさえすればと云う見方もあるが、しかし協会の日程作成案にも始めからムリがなかったとは云えない。順調に云っても到着後、余裕のあるのは一日だけ。不測の事故を計算に入れた日程とは思えないし、最良のコンディションで試合をしてもらうと云う外来チームに対するエチケットにも欠けている。台風と云う天災のためだと片付けてしまうには教訓があまりにも大きいようだ。

国際交流がひんぱんになるほど、こうした運営面の堅実さが必要となってくるのでそういう点では今回の協会の措置には残念乍ら不満を禁じ得ない。ルーマニアチームも十五日到着早々翌日が試合と聞いて不満の表情を浮べていた。事実、記者会見でも「明日の試合のコンディションは」と聞かれて「明日の試合については日本の協会側と話合いたいことがある」と、第一戦延期の希望を臭おわせていたが、ルーマニアチームには気の毒な日程であった。

協会にしてみれば、NHKTV、ラジオ両中継の関係もあり、ムリを承知で十六日第一戦案を固執したのであろうが、今後にもあることであり、国際試合の日程には充分な検討と配慮が望まれよう。

一方、こうした苦しい日程にもかかわらず当初は渋い顔をしていたルーマニア選手が翌日は、朝から雨と云う重ね々々の悪条件を苦痛にもせず、気持ちの良いプレーを見せてくれたのは、流石に世界の強豪らしい貫録と風格を感じさせた。

最近の日本のハンドボール界では、コンディショニングと云うことに気を配りすぎているのか（それはそれで大変結構なことなのだが）それとも万事がゼイタクなのか

盛夏に競う大学・高校の王座

恒例のインターカレッジ，インターハイスクールは盛夏７月全国の精鋭チームが参加して行われるが大会の話題，有力校をここで探ってみよう

三連覇狙う芝浦工大
対抗馬は日体大と関学

大学

日本のハンドボール界で一番早く組織化されたのは学生界で、昭和十三年五月には、関東学生リーグがいち早く誕生している。終戦後始めてハンドボールの試合が行われたのも東京での在京学生OB戦であった。関西でも学生リーグがまっ先に復活している。それにも拘らず、全日本学生選手権、いわゆる"イン・カレ"と云う大会の歴史は、今年で僅か三年目である。これは、関東、関西両学連が一緒になって試合をしようと云う機運が、かけ声ばかりで実現に手間どったのと、関東、関西両リーグの加盟校以外、あまり地方の大学にハンドボール部が少なかったこと等が原因であった。しかし学制改革で、それまでの高専や師範などが新制大学に切り替ったと同時に地方大学におけるスポーツも盛んになり、当然のようにハンドボールもその一つとして成長を見せて来た。地方大学のハンドボール部増加と共に、関東、関西でも両リーグ合同の大会つまり全日本学生選手権と銘打つ大会を持ちたいと云う意向が強くなったのだが、依然そうした機運は机上論ばかりで実現をみなかった。たまたま、昭和三十一年秋西ドイツ来日時に起った第二次関東大学リーグ分裂事件で、離脱したいわゆる東京五大学側が（早慶明法立）が関東学連への不満の一つとして「全日本学生選手権開催の熱意なし」をあげたのが、関係者を動かし、二年後の昭和三十三年七月東京駒沢でその第一回大会を開く動機となったわけである。なお、この時は反肉にも全日本学生選手権開催の導火役となった五大学が日本ハンドボール協会から除籍されており、第一回大会に参加の資格がないと云う出来事が起った。しかし、昨年の第二回大会では、文字通り全日本学生の王座を競うにふさわしい各校の参加を見て盛況な大会となった。

○……過去、二回の大会では共に芝浦工大（関東）が文句のない優勝を遂げており、特に昨年はこの大会が芝浦工大が前人未踏の全国四大タイトル独占の足がかりとなる全国タイトル獲得の嚆矢となったことは記憶に新らしい。大会は、トーナメント方式を採用しているが、第一回大会はレベル向上のために地方勢を少しでも余計に中央勢と試合をさせたいと云う目的で敗者復活制が採用され、この試合規定は好評をもって迎えられたが、昨年からは参加校の増加で、普通の勝抜き一本勝負に代った。過去二回の決勝戦は第一回が芝浦工大対日体大、第二回が芝浦工大対明大と云うカードで関東同志の対戦となっており、東西学生王座で圧倒の優勝回数を誇っている関学（関西）もこの大会では決勝戦に進んだ大会はない。

○……さて、今年の大会だが、おそらく三十校近いチームが参加するだろうと云われており東海学連の充実なども考えられ三十校を越すと云うことも考えられる。第一回大会の十六、第二回の二十五校から比べればその成長ぶりがうかがわれる。優勝を狙うチームはやはり関東の芝浦工大、日体大、明大、中大、関西の関学、関大、同大と云った上位校にしぼられ、地方学生界は争覇圏内に入るには力不足だろう。昨年も中京大（東海）が侮れぬと云われ乍ら一回戦で関西二部の阪大に敗れている（しかし、今年の中京大はそうはいかないと聞く。これは後で述べよう）

○……三連覇を狙う芝浦工大（関東）は今年も相変らず強い。CF山田が健在な上に、北村、金山、佐藤と云った所が伸びており、守備もCH田口、FB村上、GKも鷹見、福本と甲乙つけ難い二校を持ち、まず不安のない陣容である。もし、ルーマニアチームでも破るようなことがあれば、その余勢をかってこの大会でも快進撃を続けるだろう。本命に推してやぶさかでない。

○……対抗は東の日体大、西の関学である。日体大はLW井上、LI栗山、GK福田、FB久保田と定評ある選手を要所に配し、関東リーグで後半芝工大を追い込んだプレー等鮮やかであった。斗志満々自信のほどを見せているので、希望がもてる。一方の関学は、これまたすこぶるつきの好調。春の関西トーナメントでは同大に破れはしたが、リーグではすっかり立直り、特に日向、市場、宮地らのFW力は素晴しい。また、守備もCH宮川を中心に山淵、藤原、GK小河と不安のない布陣で対日体大、対芝工大戦は壮烈なFW戦を展開しよう。芝浦工大以上にそのまとまりを買うムキもある位、そのチーム力は固い。

関大、同大、中大、明大、早大も圏内

○……圏内にあるのは関大、同大、中大、明大、早大である。関大は関西春の二位で高打を中心としたFWと堅実な守備が看板である。特に今季は、気力も充実しており

買える。同大は春の関西トーナメントで関学を降し乍らリーグ戦では調子を落とし三位に留ったが、今藤、石橋のFW中島、中江と云ったベテランHBが調子を出すとうるさい。中大はルーマニア戦で自信をつけた平瀬、大脇のFWコンビと井、福士を中心としたバックスが頑張れば予想外の活躍を期待出来る不気味さがある。明大は心配されたFWが正岡の復帰でまとまりを見せ、清水、佐藤、溝淵らのバックスも堅実なのでクジ運に恵まれれば面白い存在となろう。昨年準優勝の面目にかけても張切りたいところだ。早大は長沢の進境で恵谷と組むFWの豪放味は昨年以上のものがある。新人の平塚も大学の試合にようやく馴れ活躍が望めるので得点力はかなり高い。ただ北沢しか頼れぬ守備陣に不安が残されている。

伏兵、京、教、中京大

○……ダーク・ホースは京大、教大、中京大である。しかし、この三校には、はっきり云って優勝を狙う実力には欠け、思わぬ大物を喰い、優勝戦線に一波乱を巻き起す〃期待〃がかけられる。京大は昨年ビッグ4に残り、特に準決勝で芝工大を苦しめた一戦は印象に残る。今季は関西四位だが、選手全員が非常に自信をつけており、上位校にはイヤな存在となろう。教大は深美と云う頭抜けたポイントゲッターがおり、彼の当りを調子ずけてしまったら一発屋だけに関東六位と云う成績だけで評価するのは危い。及川、豊島あたりが深美を助けると健斗が望める。中京大は東海学生の自他共に許す王者で今季は室内、春季選手権と二つの東海学生タイトルを得ており侮れぬ実力を持っている。昨年の東西対抗に選ばれたFB森川、FW羽上田らがその中心勢力だが、中央勢に対してどのような試合ぶりを見せるか、今大会の一つの話題と云ってもよい。

○……その他では今季久々に一部返り咲きを遂げた法大（関東）に目を止めたい。ムラ気のあるのが欠点だが宮野、寺村、吉村らのFWは走力もある。守備陣が健斗すれば勝進みそうだ。名門慶大（関東）は守備陣は一流だがFWが話にならない。しかし徐々に立直りを見せているのでリーグ戦時のようなことはないだろう。関西の下位校では荘林、東出らのFWを持つ神大と府大がどこまでやるかがミモノである。第一回大会の四位立命大（関西）はすっかり凋落してしまった。防大（関東）は得点力が非力で、斗志だけが空廻りと云った感じである。地方勢では東北学院大（東北）山口大（西日本）が一応の水準にあるようだが、そう大きな望みはかけられない。

三谷全日本学連責任者（明大）の話　インターカレッヂも今年で第三回目をむかえ、回毎に参加校が増して行くのは心強い。理想は全国の大学チームが全部集ってくれることなのだが、なかなか遠隔の大学は経費の面で難しい問題がある。そのために、当分の間は、東京、大阪交互にこの大会を開き、そのうち地方学連にそのホームグラウンドで主管してもらうようにするのがよいと思う。今年は、昨年参加しなかった西日本大学ハンドボール連盟の各校に是非出場してもらうよう、関西の学連から今、働きかけている。現在の予定では、三十内外のチームが参加する目算を立てているが、実力的にはやはり関東、関西両リーグの春の上位校が強いと思う。しかし、地方の学連も最近非常に実力が上って来ており侮れない。地方勢のために第一回の時のようにダブルエリミネーション（敗者復活制）採用の声も一部にあるらしいが、日程やグラウンドの関係で残念ながら希望にそえない。地方チームが、上京を機に中央勢とオープン戦をやって、互いの技術を研究し合ったらよいと思う。インターカレッヂは学生界のナンバーワンを決めると同時に、学生界全般のレベル向上と云う大きな目的を持っているのだし、参加諸校や加盟各学連が学生界は日本のハンドボール界のトップゾーンであると云う自覚を持って試合をして欲しいと思う。

東京五輪の有力候補

男子は中京―桜台の決戦か

高校

○……夏の全日本高校選手権（インター・ハイスクール）がまたやって来た。昨年、十周年記念大会を仙台で盛大に行い、今年は〃次の十年〃の新しい第一歩である。大会は七月三十一日から五日間、岡山県の倉敷市で行われる。岡山はハンドボールの盛んな地区の一つであり、特に高校女子界では幾つかの名門を生み日本で始めての女子チームは、戦前、ここに生れた倉敷高女であると云う由縁の土地でもある。

○……さて、今年は、大体、昨年と同じスケールの大会になるだろう。ハンドボールに限らず高校の全日本選手権と云うのは、予想の難しいことでは最たるものであり、まったく記者泣かせなのだが、ご多聞にもれず、今年の大会もどんなチームが顔を揃え、どのような地区の代表が実力があるのか、開幕してみないと判らない。しかし、昨秋からの各地区の新人大会や、春の各大会を記録の上からざっと眺めてみると、大体、次頁の表のようなチームが、出場有力校と云うことになるだろう。

○……昨年の大会に顔を出していない地区は？にし、また、第一候補以下は実力の伯仲で何れがアヤメ、カキツバタと云う地区は混戦としておいた。混戦地区は、ある意味では候補をも含めて混戦であり、こうゆう地区の代表はもまれているだけに、本大会に出て来てもかなりやると云うのが過去に見られた多くの例が示している。

○……今、ほとんどの高校スポーツの全日本大会は各地区（県）別の予選を経て、その代表による争覇と云う形式が採られているが、予選は一本勝負トーナメントである。A、Bと云う絶体有力の二チームがあったとしても、A、Bが準決勝で当り、案外、漁夫の利でCと云う文字通りの第三者が優勝をさらってしまうケースが多い。それだけに、全日本高校の本大会の予想を出場校が決らぬ前から立てるのは容易ではないわけだ。

未知の魅力が特色

○……しかし、ハンドボールの場

——第11回全日本高校各地区代表を探る——

推薦	男子 第一候補	男子 第二候補	女子 第一候補	女子 第二候補
	中京商（愛知、前回優勝）		熊本市高（熊本・前回優勝）	
北海道	函館工	函館中部高	函館東高	函館中部高
青森	青森高		?	
秋田	湯沢高		和洋女子高	
岩手	盛岡一高		岩手女高	盛岡一高
宮城	仙台一高	古川高	湧谷高	宮城三女
福島	安積高	福島高	福島女高	
茨城	石岡一高	麻生高	水海道二高	太田二高
栃木	足利高	石橋高	栃木女高	
群馬	富岡高	前橋商	高崎市女高	高崎女高
埼玉	大宮高		熊谷商工	熊谷女高
東京	明星学園	神代高	桜水商	商業高
神奈川	鎌倉学園	関東学院高	平塚江南高	大津高
千葉	?		?	
山梨	塩山高	日川高	山梨商	
静岡	清水商	混戦	清水女高	静岡城北高
愛知	桜台高	愛知工	半田高	名女学
岐阜	岐阜商	岐阜工	大垣南商	
三重	四日市工	四日市商	四日市高	津実高
長野	北佐久農高	上田高	?	
新潟	?		?	
富山	氷見高	混戦	富山女高	有磯高
石川	小松実業	津幡高	羽咋高	小松高
滋賀	八幡商高	高島高	八幡商	彦根西高
和歌山	那賀高		那賀高	
奈良	奈良育英高		添上高	奈良郡山高
京都	洛星高	混戦	京都女子高	
大阪	三国ケ丘高	寝屋川高	豊中高	混戦
兵庫	明石高	兵庫工	県尼崎高	明石高
岡山	津山商	操山高	岡山青陵高	井原高
広島	盈進商	修道高	山陽女高	呉三津田高
山口	徳山高	下関幡生高	徳山高	
香川	坂出工	高松一高	?	
高知	土佐高	高知中芸高	高岡高	
愛媛	新居浜工	今治西高	新居浜東高	新居浜西
福岡	小倉工	混戦	明善高	
熊本	熊本市商	済々黌	菊地農蚕高	尚絅高
鹿児島	鹿児島工	加治木高	加治木高	

合は、この危惧が案外少ない。と云うのは、普及したとは云え、地区によっては参加校が少いところもあり、それに一県一校と云う代表制は出場校の顔触れを、これまでの大会を参考にしながら抽出するとまず、そう番狂はせな顔を候補に推す率が少なくなる。しかし、高校スポーツ界では〝春弱くても全日本の予選では俄然強い〟と云うチームがたいてい五つや六つはある。やはり、高校スポーツの予想は難しいと云うことになるのだろうか。反面、それがどこが勝つか判らない未知の魅力を生み出すのであり、高校スポーツの大きな特色の一つであると云うことになろう

○……さて、今年の全日本高校選手権は、これまでの大会より、更に重大な意義を持っている。それは、一九六四年のオリンピック東京大会でハンドボールが実施種目に採り上げられた場合、その日本代表選手は、この、今年あたりの高校優秀選手がその有力候補に推されるだろうと云うことである。オリンピック東京大会までには、あと丁度四年ある。その時に大学の高学年、あるいは大学をその春出たぐらいの年代が体力的にも、技術的にも、最ものびざかりであり、おそらく、世界スポーツ界の推移を考えても、その頃は〝ベテランの巧技〟などと云うのは第一線には通用しなくなるのではないか。来日したルーマニアのエース、ブルガルは二十五才、国際試合に二十六回も出場した経験を持つ、いわゆる〝ベテラン〟だが、彼は「私がルーマニアのナショナルチームのポイントを何時までも背負って立っていてはルーマニアは決して強くならない。次々に若い優秀な選手が出て来てこそ、始めてハンドボール層が厚いと云うことが出来る。自分では何時までもやりたいし、やっていける自信は正直に云って充分あるが、本当はそれではいけないのではないか」とある時語っていたが、おそらく、一九六四年のオリンピック東京大会はハンドボールに限らず、若い力が非常な抬頭を示し、若さが月桂冠への最善にして最短の道になることだろうと思われる。

○……大分、話が横道にそれてしまったが、そうした意味で、全日本高校選手権に期待する所はまことに多大でありまた楽しみでもある。幸いにして一昨年あたりから、高校ハンドボール界、特に男子部門は急速な進境を示し、ことに昨年は、斯界で最も充実した内容のゲームが続いたのは高校男子界と云われたくらいであった。今年はどんなチームが、どのようなプレーを見せるか、大会への興味は深い。

○……それでは、最後に男、女両部門のAクラス校と云われるチームを数えあげてみよう。男子では二連覇を狙う中京商(愛知、推薦)が今年も強そうだ。この中京商を巡って清水商(静岡)寝屋川高(大阪)盈進商(広島)熊本商(熊本)鎌倉学園(神奈川)と云った名門校が相変らず力強さを示すことになろう。また新居浜工(愛媛)小松実高(石川)函館工(北海道)明石高あるいは兵庫工の兵庫勢も評判が高い。それに、かっての無敵チーム桜台高(愛知)が登場することも問違いない。この名門は近年、中京商の抬頭にややかくれ勝だが、関係者は、愛知予選での中京ー桜台戦を〝予選の全国決勝戦〟と呼んでいるくらいであり、今年は中京商の推薦出場が確定しており、久々に両強豪揃っての出場である。なお、ダークホースとしては足利(栃木)洛星(京都)那賀(和歌山)塩山(山梨)それに伝統の福岡勢と云う定評である。

油断ならない熊本(女子)

○……一方、女子は男子以上の混戦である。熊本市商(熊本)の二連覇を巡ると云う点では、男子の中京商と同ケースだが半田(愛知)湧谷(宮城)京都女高(京都)豊中(大阪)明善(福岡)と云ったところの実力はかなり高く、熊本としても油断はならない。問題はライバル愛知、近畿勢の実力がどの程度かと云うところにある。

第12回全日本総合選手権の話題を拾う

……今年の全日本総合選手権は来る8月10日から14日までの5日間秋田……
……県下で行われる。全日本総合選手権の話題を幾つか拾ってみよう……

杉　山　茂
（N H K 運動部）

"全日本の歴史"

ハンドボールの全日本選手権が始めて争われたのは昭和十二年十一月十一日、明治神宮大会の一部としてハンドボール競技が行われたのを全日本選手権としたのが第一回で、日体、大塚クラブ、青山師範、慶大の四チームがトーナメントを行い、決勝で大塚クラブが6－4で日体を破って初の優勝者となった。戦前の全日本は引き続き昭和十三年（優勝日体）昭和十五年（日体）昭和十七年（日体クラブ）の四回行われ、一方女子は昭和十五年（優勝倉敷高女）昭和十七年（同）の二回行われた。戦争で中断されたこの大会は昭和二十五年一月まで復活を見ず、戦後の全国的な大会は国体が昭和二十一年から行われていたにすぎなかったが、各地の整備が旧に復した昭和二十五年に全日本選手権はその名を全日本総合選手権と改めて一宮市の九品寺ハンドボール場で再開された。記者の記憶に誤りがなければ参加チームは男子十五、女子三であった。戦後の全日本の大きな特長は全日本総合選手権の名の通り協会に登録しているチームなら高校、大学、クラブ、実業団なんであろうと予選なしで自由に参加出来るそのオープン制度にあった。こうした制度の是非はともかく、当時、競技人口の増大と、競技の普及を狙った協会としては適宜な対策であったのである。その後は御承知の通り回を追う毎に参加チームも増し、内容的にも充実の一途を辿っているのは喜ばしい。男子が比較的順調にこの大会が発展して行ったのに引かえ、女子は始めから参加チームが少なく第一回三、第二回二、第三回三と低調な大会が続いたあと、遂に昭昭二十七年十二月の第四回大会は参加チームがなく女子の部だけは行われないと云うことがあった。しかし翌年の第五回大会には七チームが参加し、その後は五チームを下廻るコトもなく、昨年の第十一回大会では十六チームの参加を見るまでに成長した。

過去の優勝者

昭和二十五年一月に第一回が開かれてこれまで十一回優勝者が出ているわけだが、別表を見ても判る通り男子では圧倒的に日体系チームが多い。日体系以外のチームの優勝は第四回のセントポールクラブAと、昨年の芝浦工大の三チームしかなく、その他の九回は全部日体系チームである。いかに日体がハンドボール界に根強い地力を持っているかが判ろうと云うものである。このうち、純然たる学生チームが覇者となった例は昨年の芝浦工大だけで、昨年の芝浦工大の実力の高さが推されよう。女子では断然第九回から三連覇を続けている愛知紡績の偉業が光る。第七回の水海道二高第八回の半田高は共に高校の現役チームだが面白いことにその年年の全日本高校（女子）選手権には両チームとも姿を見せていない。つまり、高校選手権ではそれぞれ県予選で敗れてしまったチームが全日本総合の優勝者となったわけである。

最近の特長の一つ

として、全日本総合を開くと、その地区のハンドボールへの関心と普及度が急上昇すると云う事実である。第九回の氷見（富山）大会、昨年の水俣（熊本）大会などは、中でも刮目すべき普及を遂げている。東北地区では従来、昭和27年に福島で国体が、昨年は仙台（宮城）で全日本高校選手権が行われているだけで、全日本総合選手権の開催はもち論今回が最初である。それだけに東北ハンドボール界のこの大会に寄せる期待は大きく、特に主管の秋田県協会は、これを機に一躍、ハンドボール界のトップゾーンに成長すべく意欲的なところを見せており、四月には審判講習会、技術講習会の県下の有力チームを集めて行っているほどである。秋田はボールゲームの盛んな土地だけに新興スポーツとしてのハンドボールが急速な普及と発展を遂げるのに条件はよい。今年の全日本、来年の国体と中央のレベルに触れる絶好の機会だけに成功が期待される。

芝工大の二連覇は？

優勝争いの一つの興味は、男子で芝浦工大が昨夏に続いて二連覇を遂げることが出来るかと云う点だ。結論から先に云うなら今春の関東学生リーグを見た感じでは難しい。第一の原因は昨年優勝したメンバーから一挙に六人を卒業で失っていることだ。この穴が完全に埋っていないのは痛い。「王座はとるより守る方が難しい」とよく云われるが、まさにその通りであり、去年のように現役だけの力で、全日本の王座に居座ることは出来ないであろう。芝浦勢がその傘下に優勝杯を維持するには、やはり若手OBの援軍が必要だ。全芝工大なら優勝出来るが芝工大では優勝出来ないと明言してもよい。しかし全芝工大で出場するとなると、当然シード資格はなくなる。（昨年の芝工大と同一メンバーであっても、その性質（編成）は全く違うのであり、シードの配慮は無用である）そうなると緒戦から強チームと当ることになり、苦しいスケジュールになる覚悟が要よう。芝工大か、全芝工大か、芝浦関係者にとっても頭の痛いチーム編成であり、微妙である。

男子の優勝候補

ルーマニアと対戦した十チームのうち、全関学と全愛知を除いては殆どが出場を確定している。全愛知もその母体となった桜丘会の連中が登場することになれば、実質的にはそう変りはない。そうなれば国際試合に登場したチームの何れもが優勝圏内にある有力チームと云うことが出来よう。特に全日体大は最右翼である。この他に全国の有力チームを探れば全明大、山口クラブ、豊陵会（大阪）大崎電気（東京）辺りであろう。このうち西日本勢は大会地が遠隔だけに出場か否かははっきりしない。現役チームも今春の関東学生リーグでは三位になっており面白い存在となろう。大崎電気は本誌先号にも紹介されていた通り、手強いチームである。選手が額面通り働けばダークホースである。

大崎電気と桜丘会

この大崎電気は昨年無敵を誇った芝浦工大の宮原（藤）以下と、日体大のエースだった竹野らで今春チームを編成したばかりだがその戦力はズバ抜けておりあるいは優勝さえ狙えよう。大崎を実業団、芝工大を学生の代表とするならクラブ界の代表は桜丘会（愛知）である。桜丘会は云わずと知れた高校界の名門桜台高のOBクラブでメンバーは全日本の代表的選手ばかりでその実力は大豪の名にふさわしい。ルーマニア戦で活躍した清水、堀、宇津野、斎藤らの守陣、牧野、浅野、高村らの攻撃力は特級品で、イレヴンの鼻息は荒い。

全日本総合選手権大会　これまでの優勝者

	【男子】	【女子】
第1回	日体桜	東京第1師ク
第2回	スワロー松	オール山梨
第3回	スワロークラブ	芙蓉クラブ
第4回	セントポールA	中止
第5回	全日体大	全静岡城北高
第6回	全日体大	全静岡城北高
第7回	西日本日体OB	北海道二高
第8回	全日体大	半田高
第9回	全日体大	愛知紡績
第10回	全日体大	愛知紡績
第11回	芝浦工大	愛知紡績

女子では

愛知紡績の四連覇が成るかが最大の話題となろう。愛知紡績は同じ七人制であり乍ら室内選手権での優勝は過去に一回もないが、この全日本総合選手権となると、めっぽう強い。第九回大会に初出場して初優勝したあと、連続三年、この大会では負けを知らない。もう少し詳しく云うなら大会通算10戦10勝、総得点一一二、総失点四一と云う圧倒的な数字を示しており、一点差の試合は昨年の決勝戦、対熊本クラブの8対7一試合で、あとは殆どダブルスコア、ないしはトリプルスコアと云う無敵ぶりである。今、全国に愛知紡績と互角の実力を持つチームを探すとなると、今春の室内選手権決勝で顔を合せた熊本クラブをおいて他には一寸なさそうだ。その熊本クラブがこの大会に参加するかどうかは、その道程の遠さを考えると一寸難しい。となると愛知紡績のまたまた独走なるかと云う見方が強くなるのだが、しかし涌谷高クラブ（宮城）の日体大女子、オール埼玉と云った昨年の東京国体の上位チームが顔を見せ、打倒愛知紡績に秘策をねってぶつかるようだと、その四連覇は必しも楽観を許せなくなる。また、女子は高校の現役チームに、思わぬ強チームが登場して来る例がしばしばあり、参加チームが昨年同よう十を越すようだと波乱が起きる期待は充分である。大阪、静岡、東北関係の名門チームがこぞってこの大会に出て来れば俄然面白い試合の連続となろう。

東北チームの活躍は？

前にも述べたように最近の東北ハンドボール界の充実ぶりは目を見はらされ、特にその中心である宮城県は、ルーマニアとの国際試合、更には昨年の国体で皇后杯一位、天皇杯四位となった実績で自信を高めており、この大会でも男子の全宮城、女子の涌谷チームの活躍は注目してよいものがあり東北学院大の実力も侮れない。その他では岩手の白亜クラブ、福島の福島クラブ、安積クラブ、青森の青森クラブと云った一般男子の試合ぶりが東北のレベルを知る上にも見逃せない。地元の秋田は一般男子の湯沢クラブ、一般女子のオール秋田あたりがどこまで中央勢に食下るかが期待の的だが、むしろ、この大会を終ったあとの飛躍と成長の方が大きい問題であろう。高校女子の和洋女子高は昨年の全日本高校では二回戦に進み古豪那賀高（和歌山）とよい試合をしており、その成長ぶりが楽しみだ。

"全日本"への希望

第一回当初はそのオープン制度に特色のあったこの大会も、真の発展と充実を心がけるならば、そろそろ地区代表制度を布いて出場チームを限定してもよい時機が来ているように思える。過去十一回、その開催地の内訳けは東京二、東海二、関東一、甲信越三、近畿一、中国一、九州一で、今回の東北を加えれば、残る地区は四国、北海道だけで、この両地区も四国では全日本高校、北海道では国体、国際試合の開催経験があり、一応「全国的な大会の開催による競技の普及」と云う面は成し遂げられたと見てよい。そうなれば、大会の権威からも地区別に予選を行って代表を決めると云う、他競技界が布いている制度に近づくのが本道ではないだろうか。地区予選以外にも学連上位チームの推薦制度、地元チームの優先出場などを加えれば、真の全日本を争うに足る強豪チームが一堂にイヤでも競そうし、充実した試合が連続するだろう。男子部門だけでも予選代表制を具体化するよう提案したい。また、この大会には不思議と関西学生諸校が姿を見せないのは何故か。

関東学生春季リーグ総評



芝工大・FW塩川のジャンプ・シュート，日体大・BK久保田の頭上を抜く

昭和三十五年度関東学生ハンドボール春季リーグ戦は五月八日駒沢ハンドボール競技場にて、その幕を開けた。各校共今春多くの有能なプレイヤーを卒業させた後だけに、その穴をどの様に補充しそしてどんなプレーを展開するかの興味と、昨年日本における四大選手権を独占し無敗の記録街道を歩み続ける芝浦工大が今春大量の卒業生を出した後どの様なチームプレーが見られるか、又この芝浦工大を食うのはどこかの期待と注目を浴びるリーグ戦となった。開幕前の下馬評では卒業生の最も少なくそして比較的陣容に影響の少ない昨年度秋季リーグ第二位(同率)の中央大と早大あたりが優勝を奪うのでないかと云う声も聞かれたが、いざ幕をあけてみるとこの両校は余り進歩の後が見受けられずむしろ陣容に余り変動がない故か、少々意欲的プレーが少なかった様に思はれる。それに比べ日体大の奮起はめざましく昨年と比べ劣らずとも優ったチームとなって居り、それに春季リーグは強いと云はれるジンクスをもつ明治大、そしてリーグ連覇をほこる芝浦工大、昨年見せた様な好プレーは見られなく内容はやや落ちた感がしたがやはり強く、日程も消化されるにつれこの三者三色の激しい争いとなった、結局最終日無敗同志の芝浦工大—日体大の決勝となり全力を傾注しファイトに燃えた日体大があるいはと云う場面もあり、よく追いタイムアップ寸前迄その行方がわからぬと云うエキサイトゲームであったが、わずかに勝負に対する最後の気力の差で、芝浦工大の優勝する所となり、ここに芝浦工大六シーズン連覇する所となった。

二部では法政大、立教大共今度こそ一部への念願を果すべく両者相争ったが、昨年よりほとんどメンバーの変更のない法政大が優勝一部最下位の防衛大と入替戦の末幾シーズンぶりかで一部へ昇格した。

優勝の芝浦工大は昨年見せた様なするどいスピードとパスワークは見られず、粗雑だと思はれるプレーがありせっかくのチャンスをものに出来ない場合が各所にあった。まだまだ練習量の不足が目立ちこれからのチームの様に見受けられた。日体大は昨年の様なとりこぼしもなくチーム全体が意欲的な内容に移り変り、呼吸のあったチームワークは今後の日体大に大きく期待出来そうだ。明治大は今春季リーグも好調で三年生以下でしめたメンバーも今後に楽しみをもたせるが、只三年生以下でしめる故以か、伝統のネバリの明治と云う姿が一寸見れなかった様な気がする。その姿あってこそ明治の強さがあるのでなかろうか。今季の中央大にはもっと沢山の期待を寄せたがどこか一本歯がぬけた様な単調なプ　が多かった。大脇を中心としたホワードにもまだまだ努力次第で新しい分野が残って居る気がするし、バックスの好守備と共に一度奮起すればすばらしいチームになると思う。この中央大と共に期待したのが早大で、恵谷一人に依存する事なく長身の長沢や吉田の様な好プレイヤーを揃えて居るのだからそれ等と共にチーム全体が覇気に燃えれば、開幕前の下馬評通りの事が成せるのでなかろうか。強肩深美、及川をもつ教育大は今季上位校を大部悩ませる存在であったが、もう一歩の努力とこの二人を充分に使いこなせるだけのコンビが出来上り、パックスとして、もう少しの所での失点を考え併れば強威なチームとなろう。

雨中戦であったとは云え芝浦工大を一点差に追いつめた慶応大の健闘はたたえてよい。しかしそれ以後あの面影が消えたのはいかなる事か惜しまれる。只相手バックスの真中へだけの集中攻撃で木本一人の強肩に頼っていてはならないと思う。昨秋シーズンに立教大を破り一部へ昇格した防衛大は予想以上に健闘し、よく頑張った。開幕以来点数こそ離されたが、スピードの点、そして動きについても石母田、小川を中心によかったが、シュート力に欠け、特に法政大との入替戦にそれが目立ったのは惜しまれる。再び二部へ逆戻り

関東学生ハンドボール・リーグ戦技術評

佐野　和夫

今年はルーマニアチームとの国際試合のため例年より早く実施されたがそのため各大学とも調整が悪く前半は凡プレーが目立っていた。後半に至り除々にチーム力も向上し、閉幕近くは夫々各大学の特徴を生かしたプレーも多く見られるようになった。

毎年そうだが、春は、昨年活躍した選手、リードマンが卒業したりしてどうしても秋季に比べて、あらゆる点で迫力に欠けている。しかしハンドボールシーズンはまだこれからであることをよく考えて、春は研究的に、思い切ったプレーをやれば変った意味で面白味もでてくるだろう

技術的な面では全般的に、まだパスプレーが少い、ハンドボール競技最も大切な要素はスピードにあることは衆知の通りで、それはパスワークと走力が必要になってくる。この意味でまだまだ走りたりない感がある。攻撃についてみれば相手の防禦陣の前までは一応走るが、防禦陣に入ってからの動きが止まってしまうと云ったケースが多い。そして、ここから各チームの主力選手の個人プレーによってドリブルプレーが多くなってしまうのである。このため混戦から投げるシュート技術は向上してくるが逆にノーマーク・シュートやロングシュートが雑になっている。シュートのスピードや力は年々強くなっているが、キーパーに対してのフエントシュートなどのシュート技術が不足している。防禦については、最も基礎であるフットワーク（フォワードのスピードある動きに対応できるバックの脚力）が忘れられ手段を選ばないで、ただ防げばよいと云ったプレーが見られることもあり残念であった。このためゴール前での反則が多くなり、反則の質も自然に起きたのでなく、故意と思われるような乱暴なプレーもあった。バックのコンビネーションプレーも悪く、特にリターンパスプレイに対する研究が不足である。防禦の最後の線であるゴールキーパーについて見ると、防禦陣との連けいが悪く、このため動きが早すぎて逆をつかれる場合が多かった。低いシュート（ワンバウンド）に対しても弱いのではないか。

二部の各校については以上の諸点が一層弱く、特に走ることは一部と、相当の差がある。もっと走り、しかもボールを扱う基本技術の練習が要求される。

以上述べた中でさすがに芝工大日体大はよく走り、技術的にも現在ではトップレベルである。ただゴール前の動きが時々ゴールに平行になることがあること、雨天の際の条件を考慮してプレーすることに研究の余地がある。日体大は芝工大と同等の走力をもっているがパスのコースが正直すぎる。そして攻撃がゴールエリヤの中央に集中する。日体大特有のスピードを生かして相手の防禦の動きや隊型をよくみて適応性のある攻撃をし、或は攻撃のペースを考えるなどこれからの問題点だろう。防禦陣は身長のハンディはあるがよく動き、キーパーもよい。明大は昨年に比べてフォワード全員がよくボールをキープし或はよく動き得点もあげていたが、ゴール前での動きが小さく、ドリブルが多い防禦陣は早いリターンパス攻撃に時々ノーマークを作っていた。早大の攻撃は常に雑である、体力的には他校にすぐれているのであるから更に攻撃範囲を広くし、今一歩早い動きの研究が不足している。防禦は、技術的な防禦法を研究する必要がある。特にフットワークを生かし防禦の連けいプレーを行うことに心掛けるべきである。中大の防禦も同様である。攻撃は相当スピードがあり個人プレーをよく生かして動いているが攻撃範囲が狭いことと、作戦、攻撃のペースなどが、これからの問題である教大、慶大共によきリードマン不足であり、特定の個人のみでなく全員が生きてくる動きを考えることと競技中走り通せる脚力、確実なパスワーク専問的な技術の練習が必要である。防大は二部に落ちたが法大よりスピードでは勝れていた。しかし、ゴール前での動きが全く悪く、殆んど個人プレーであった。法大も同様であり、むしろ立大の方がオープン攻撃では勝れていた。シュートについてはどのチームも未熟である。なお一層の走力をつけ、ゴール前での動きを早め、走力をシュートに生かす工夫をすべきだ。

もう一度顧みると、各校とも、リターンパスと個人のフェントに頼ることが多い。攻撃が、真中に集中しすぎるため攻撃範囲を狭くしている。防禦は反則が多い。これは技術の未熟さを反則で補っていると見られても仕方ない。各自の脚力を生かし、連けい動作の研究をして欲しいものである。

となったが気力のある防衛大の事、今後に期待したい。二部では開幕前の予想通り法政大、立教大の決戦となったが法政大のネバリ勝ちと云えよう。入替戦においてもタイムアップ十秒前逆転するあたりにもそれがうかがえた。一度一部へ昇格した以上、二部時代の様な舞台はまずないと云う事を肝に銘じ秋季リーグに健闘して欲しい。法政大に破れたが選手自体にまだ若さを感ぜられる立教大はこれからのチームの様だ。住年の立教大となる日を待ちたい。それ以外に二部では学芸大の進歩が注目をひいたが只取りこぼしのないスタミナのあるチームになる事が必要だ。東大は西に京都大のある事を忘れてはならない。順天堂大、茨城大、武蔵工大、千葉大にはもっと熱意と努力を注文したい。全般にまだまだ新編成のチーム力しかみられず、もっと積極的に研究と錬磨をせねば学連そのもののレベルが上らぬと云う事を念頭において欲しいし、又基礎技術の点が欠けるのかそれを上まわる技術に欠けるのか、ファイトあるプレーと、乱暴なプレーと混同されて居る様な場面もあった様に思える。審判技術と共に併せてこの点もよく研究して、来るべき大会や秋季リーグにはもっと内容の充実した試合が展開される事を期待したい

関東学連理事長　中沢　重夫

関学、遅攻十（プラス）速攻の強み

関　西

関西はやはり関学がその攻、守に地力の強さをはっきり表はして、東の芝浦工大同様六連覇を飾るとともに、二十三回目の優勝を記録した。八校中、唯一の百点台の得点を記したのでも判る通り、そのFW力の強さが六連覇の原動力であった。それと同時に勝利への自信の強さは八校中ずば抜けたものがあり、特に関大戦で前半リードを許し、後半も殆ど試合の主導権を握られ乍ら逆転勝した例など、もっともよくその特長が見られた試合であった。従来、関西の攻撃と云うと遅攻がすぐ思い出されたが、関学は、一昨年あたりからそのカラを破って速攻のペースを身につけ始めていた。その成果が、一応今春のリーグ戦で発揮されたと見てよいだろう。遅攻を常用していたのでは本格的速攻チームに勝てないと云つたらば極言かもしれないが、ルーマニアチームの遅攻を見ても、それは速攻の基礎の上に立った遅攻であり、遅攻の成功は速攻の消化があって始めて実を結ぶと云うことが判る。しかし関学の遅攻と云うのは、身についたものであり、かって東西学生王座に六連覇を遂げた輝ける実績を残しているだけに、関学が関東派の速攻をマスターしたならば学生界では唯一の速、遅攻を使いわけるチームに成長するだろう。関学がこうした〝転換〟を試みるのは、打倒芝浦工大の並々ならぬ斗志の表はれと見るのはうがちすぎるだろうか。かって学生界の王座に永く君臨した関学が過去二回の全日本学生選手権に覇を唱える機を失しているだけに、今年あたり、どうしても、そのタイトルを掌中にしたい、それには常勝芝浦工大を破ってこそ、始めてその道が開ける。斗将で鳴らした渡辺一巳氏を監督に迎えた今シーズンの関学の活躍ぶりは注目してよいものがある。この関学の中心となったのはFWではエース日向、バックスで富川、山淵、藤原（なお先号、関西学生リーグ展望で山淵、湧永のFBとしたのは山淵、藤原の誤りにつきお詫びして訂正します）GK小河と云った面々である。このうちCF日向は、おそらくサウスポーとして全日本でも右に出る者がいないのではないかと思はれるぐらいその走力、シュート力は鮮かである。一六五糎と云う上背のなさが惜しいが、その巧技はそれを補って余りある。バックスも定評ある富川らが額面通りの活躍を示したので無難だった。二位となった関大は、関学を今一歩に追い込み乍ら、またしても優勝のチャンスを逸した。失点では関学の五十五に次ぐ五十六と健斗を示し、得点力も一試合平均一四点弱で悪くない。

関大へ課せられた試合の展開力

関大に残された最大の課題は試合の展開力ではないだろうか。個々ではやはり高村のプレーが光っていたし、バックスの活躍も目立った。期待された同大は春のトーナメントに優勝し、自信満々の布陣だったが、関大に一敗して気落ちしたか、関学戦は不出来だった。対関大戦は関大の気力に押された感じで、優勝への斗志盛んだっただけに同大にしては不覚であった。総得点九十二、総失点八十三の数字は勝った試合も楽勝ばかりでなかったことを示す。秋での立直りが待たれよう。この三校に比べて他の五校は相変らず力不足で、僅かに京大が若手の優秀選手がよく働いて四位に入った試合ぶりが目についたが、三強にはやはり攻守に一日の長を認めないわけにはいかなかった。Bクラス四校の中では立命大が二季続けてテールエンドになった低調が余りにも淋しい。七試合で四十七点と云う得点力がおそまつすぎる。入替戦で阪大を辛うじて降して一部に留ることが出来たものの、一部各校からは完全に取残された形である。その他三校は、帯に短かし、タスキに長しと云った評言がピッタリで共に二勝五敗で五位に並んだ。この中では神大の得点力が僅かに目立ち、関大に二点差、同大に一点差の食下りぶりは認めてよい。府大も緒戦で同大に好勝負を挑んで注目されたが、その後はやはり力不足が表はれ、以後はあまり振はなかった。甲南大は久々の一部で張切ったプレーを見せていたのは、このチームのために喜ばしいことだが、得点力がなく神大を破った善斗を含んで二勝に留った。結局、一部ではビッグ、スリーとそれに京大を加えたAクラス四校と下位校のレベルの差が歴然としすぎ、試合としての興味は、三校の角逐による終盤戦だけにしぼられてしまった。関西学生リーグの発展は、これらBクラス校の充実と奮起いかんにかかっており、いつまでもこのような状態が続いているようだと、関東リーグと正面から対抗出来るチームはますます少くなってしまうだろう。関東、関西のよい意味での対抗意識か盛上ってこそ学生界の評価が望め、強いては日本のハンドボール界に活気を与えることになるわけでその意味で、関西リーグが、関学の独走をただあれよ、あれよと見送り、六連覇を許し、そのリーグ史の九割近くのシーズンの優勝を関学にさらわれていると云うのでは、あまりにも他校が不甲斐ない。

しかし、見方を変えれば、王座は奪るより守る方が難しいと云はれる難事を成し続ける関学の毎シーズン平均した実力の高さを大きく評価しなければならないのかも知れない。なお、二部では、阪大が一位となったが、入替戦で破れて一部入りの宿望を果せずに終った。その他では桃山学院大が着実な進境を見せて二位になった試合ぶりが目につく。

ハンドボール豆辞典

日本で初めてハンドボールがラジオを通じて全国に実況されたのは昭和29年1月15日西宮で行はれた第七回東西学生選抜対抗（NHK榎本アナ担当、解説馬場太郎氏）の時で、なおこれ以前に、昭和27年10月19日福島国体の天覧試合と28年10月23日愛媛国体でそれぞれ録音実況として何れもNHKから放送された記録がある。

芝工大(東)関学(西)六連覇

＝東西学生春季リーグ終る＝

秀れたFW力で他校を圧倒

▽去る五月上旬から開幕していた東西学生春のリーグ戦は、芝浦工大と関西学院大がそれぞれ六連覇の偉業を遂げて終幕した。


写真は優勝杯を受ける芝工大高見選手

既報以後の成績

▽第四日（5月21日）
芝工大 18（9－3 9－1）4 明大
早大 12（4－2 8－4）6 慶大
中大 12（5－4 7－3）7 防衛大
日体大 12（4－6 8－2）8 教大

▽第五日（5月22日）
明大 14（6－4 8－3）7 防衛大
日体大 16（9－5 7－4）9 中大
芝工大 19（7－1 12－6）7 早大
教大 11（3－5 8－3）8 慶大

▽第六日（5月28日）
日体大 14（8－2 6－7）9 早大
芝工大 20（9－5 11－5）10 中大
明大 15（8－6 7－5）11 慶大
教大 16（9－5 7－4）9 防衛大

▽第七日（5月28日）
慶大 8（1－2 7－1）3 防衛大
明大 13（2－7 11－4）11 教大
中大 14（7－8 7－4）12 早大
芝工大 13（9－3 4－7）10 日体大

〔日体〕		〔芝大〕
福田	GK	福本
石松	FB	尾藤
久保田	FB	村上
青木栄	HB	勝倉
宇田川	HB	田口
蓮井	HB	武井
青木義	FW	佐藤
河上	FW	北村
小林	FW	山田
栗山	FW	金山
井上	FW	塩川
23	ST	40
32	FT	31

交代＝FW越前
（主審 岡村）

▽二部第四日
学芸大 13－9 千葉大
法大 17－10 東大
立大 21－7 順天堂大
茨城大 15－5 武蔵工大

▽第五日
法大 27－7 茨城大
立大 28－13 学芸大
東大 16－3 武蔵工大
順天堂大 12－5 千葉大

▽第六日
茨城大 16－13 千葉大
法大 13－5 順天堂大
立大 21－7 東大
学芸大 17－5 武蔵工大

▽第七日
武蔵工大 11－9 千葉大
学芸大 13－9 茨城大
東大 7－4 天順堂大
法大 14（6－3 8－6）9 立大

▽一・二部入替戦（5月30日）
法大（二部）11（6－5 5－5）10 防衛大（一部）
この結果法大が一部に昇格。なお法大は昭和三十一年春以来八シーズンぶりの復帰である。

▽第三日（5月21日）
関大 18（6－3 12－3）6 大府大
京大 12（4－2 8－8）10 甲南大
関学 19（10－2 9－3）5 立命大
同大 11（5－6 6－4）10 神大

▽第四日（5月29日）
同大 16（5－1 11－5）6 立命大
京大 15（10－4 5－5）9 大府大
関大 18（9－3 9－2）5 甲南大
関学 19（9－4 10－3）7 神大

▽第五日（6月5日）
大府大 12（6－4 6－3）7 立命大
甲南大 10（3－4 7－2）6 神大
同大 15（9－1 6－9）10 京大
関学 12（5－8 7－3）11 関大

▽第六日（6月11日）
神大 10（5－6 5－3）9 府大
甲南大 10（2－2 8－4）6 立命大
関学 12（7－5 5－3）8 京大
関大 10（5－4 5－5）9 同大

▽第七日（6月12日）
大府大 8（5－3 3－4）7 甲南大
神大 13（8－6 5－3）9 立命大
関大 8（4－3 4－3）6 京大
関学 16（9－5 7－7）12 同大

関東学生春季リーグ一部勝敗表

	芝	日	明	中	早	教	慶	防	勝	敗	総得点	総失点
①芝工大	×	○	○	○	○	○	○	○	7	0	161	53
②日体大	●	×	○	○	○	○	○	○	6	1	89	56
③明大	●	●	×	○	○	○	○	○	5	2	81	81
④中大	●	●	●	×	○	○	○	○	4	3	83	83
⑤早大	●	●	●	●	×	○	○	○	3	4	72	81
⑥教大	●	●	●	●	●	×	○	○	2	5	81	88
⑦慶大	●	●	●	●	●	●	×	○	1	6	48	67
⑧防衛大	●	●	●	●	●	●	●	×	0	7	40	88

2部順位①法大7勝②立大6勝1敗③学芸大5勝2敗④東大4勝3敗⑤順天堂大3勝4敗⑥茨城大2勝5敗⑦武蔵工大1勝6敗千葉大7敗

関西学生春季リーグ一部勝敗表

	学	関	同	京	府	甲	神	立	勝	敗	総得点	総失点
①関学		○	○	○	○	○	○	○	7	0	111	55
②関大	●		○	○	○	○	○	○	6	1	97	58
③同大	●	●		○	○	○	○	○	5	2	92	68
④京大	●	●	●		○	○	○	○	4	3	77	69
⑤大府大	●	●	●			○	●	○	2	5	58	83
⑥甲南大	●	●	●	●	●		○	○	2	5	56	88
⑦神大	●	●	●	●	○	●		○	2	5	67	84
⑧立命大	●	●	●	●	●	●	●		0	7	47	102

2部順位①阪大5勝1敗②桃山学院大、大市大、大歯大4勝2敗⑤大工大⑥大経大⑦大阪学芸大

地方だより

山口大、七度目の優勝

西日本大学大会

第十回西日本大学ハンドボール大会は六月四、五の両日、岡山大グラウンドで前年優勝の熊本商大を始め四校が参加リーグ戦形式で行はれたが、山口大が岡山大、熊本商大と同率乍ら得失点差の多少によって上廻り七度目の優勝を遂げた

▽第一日
岡山大 11（6―5、5―5）10 熊本商大
山口大 9（4―2、5―2）4 岡山大
熊本商大 19（14―8、5―6）14 鹿児島大

▽第二日
山口大 21（10―4、11―4）8 鹿児島大
岡山大 11（5―5、6―5）10 鹿児島大
熊本商大 12（6―2、6―6）8 山口大

▽勝敗表

	山口大	熊本商大	岡山大	鹿児島大
山口大	×	○	●	●
熊商大	●	×	○	●
岡山大	○	●	×	●
鹿 大	○	○	○	×
勝	2	2	2	0
負	1	1	1	3
総得点	38	41	26	32
総失点	24	33	29	51
得失差	14	8	−3	−19
順位	①	②	③	④

（年次優勝校）第一回〜第五回 山口大（五連覇）第六回 熊本商大、第七回 熊本商大、第八回 山口大、第九回 熊本商本

宮城 仙台一（男）涌谷（女）

高校総体でも優勝

第九回宮城県下高校総合体育大会ハンドボール競技は県下高校の主力チームが顔を揃え、六月四・五・六の三日間、仙台二高グラウンドで行はれたが男子は仙台一高女子は予想通り涌谷女高が優勝した。

▽男子一回戦
仙台二高 14―7 仙台高
古川高 10―4 仙台育英高
古川工 16―11 仙台商

▽同二回戦
仙台二高 9―6 古川高
仙台一高 11―10 古川工

▽同決勝
仙台一高 10（0―0、3―1、3―4、4―3）8 仙台二高

▽女子準決勝
古川女高 6―2 宮城一女
涌谷女高 14―1 宮城三女

▽同決勝
涌谷女高 20（11―1、9―0）1 古川女高

広島高校総体では

盈進と山陽女高

第十三回広島県下高校総合体育大会ハンドボール競技は六月十一・二の二日間盈進商グラウンド他で行はれたが、男子は好調の盈進商Aが、女子は山陽女子高Aが呉三津田高の追撃を振切り、それぞれ優勝した。

▽男子一回戦
宮原高 7―1 三原工
山陽高 8―7 盈進商B
修道高 6―5 広島高

▽同二回戦
盈進商A 22―12 宮原高
修道高 13―7 山陽高

▽同決勝
盈進商A 15（7―3、8―2）5 修道高

▽女子一回戦
山陽女A 20―0 世羅高
山陽女B 2―1 進徳高

▽同二回戦
呉三津田高 12―1 山陽女B
山陽女A 11―4 賀茂高

▽同決勝
山陽女A 4（2―2、2―1）3 呉三津田

女子の決勝は好試合だった。四月の県知事杯大会で敗れている呉三津田は、雪じょくを期して気力のある攻守を見せたが、山陽女はディフエンスの健斗で、前半の呉三津田の攻撃を一点に抑えたのが利き、僅かな優位をそのまま後半にもち込んで優勝を遂げた。

半田高が代表に

全日本高校愛知予選

全日本高校選手権の出場権を賭けた愛知予選女子の部は六月十二日松蔭女高グラウンドで準決勝、決勝の三試合を行い、優勝候補の半田高が段違いの強味を発揮して決勝を握った。

▽準決勝
半田高 19―5 愛知商
瑞陵高 18―1 名古屋女高

▽決勝
半田高 21―0 瑞陵高

兵庫は明石、尼ケ崎

兵庫県下高校総合体育大会ハンドボール競技は男子が明石高、女子は名門県立尼ヶ崎高が優勝した

▽男子準決勝
県兵庫 12（6―3、6―1）4 竜野高
明石高 20（11―0、9―0）0 甲陽高

▽同決勝
明石高 8（4―1、4―2）3 県兵庫

▽女子決勝
県尼ヶ崎 10（5―1、5―1）2 明石高

中京商と半田高

愛知高校総体で勝名乗り

第十四回愛知県高校総合体育大会ハンドボール競技は五月二十一・二十二の両日松蔭高グラウンドで行はれ男子は中京商、女子は半田高がそれぞれ優勝した。

▽男子一回戦
一宮高 11―3 松蔭高
桜台高 19―3 豊橋商
向陽高 13―6 岡崎北
愛知工 12―8 豊橋時習館
旭丘高 10―8 起工
昭和高 16―7 岡崎高
中京商 27―1 蒲郡高
半田農 6―5 尾北高

▽同二回戦
桜台高 14―0 一宮高
愛知工 12―6 向陽高
昭和高 10―6 旭丘高
中京商 9―1 半田農

▽同準決勝
桜台高 20―5 愛知工
中京商 13―3 昭和高

▽同決勝
中京商 8（6―2、2―3）5 桜台高

▽同三位決定戦
愛知工 16―14 昭和高

▽女子一回戦
名女院 5―3 豊橋東高
愛知商 10―1 犬山高
一宮高 10―1 名女商
稲沢高 11―0 半田農
松蔭高 4（抽せん勝）4 尾北高
昭和高 4―1 安城高
瑞陵高 5―4 蒲郡高

▽同二回戦
名女院 4（抽せん勝）愛知商
半田高 11―3 一宮高
稲沢高 9―3 松蔭高
瑞陵高 7―4 昭和高

▽同準決勝
半田高 13―2 名女院
稲沢高 12―3 瑞陵高

▽同決勝

半田高 14（7－2、7－1）3 稲沢高

鎌倉学園圧倒的
神奈川高校大会

神奈川県春季ハンドボール大会高校の部は六月四、五、十二の三日間久里浜自衛隊グラウンドで行はれ、相変らず鎌倉学園高が強味を発揮して優勝した。

▽男子一回戦
鎌倉学園高 17－4 翠嵐高
関東学院高 6－3 法政二高

▽男子二回戦
少年自衛隊 13－1 横須賀工
平沼高 9－3 横浜商工
鎌倉学園高 13－2 三浦高
関東学院高 13－2 希望ヶ丘

▽同準決勝
鎌倉学園高 9－3 少年自衛隊
関東学院高 13－2 平沼高

▽同決勝戦
鎌倉学園高 14（6－0、8－3）3 関東学院高

※

第七回大阪府私学綜合体育大会ハンドボール競技は五月二十八、二十九の両日桃山学院グラウンドで行はれ男子は桃山学院が興国商を12対1で破って優勝、女子はリーグ戦の結果、大谷高が強力なFW力で4勝0敗で優勝した。

京大、慶大に快勝

今年度、東西学生交流定期戦のトップを切る第十三回京大対慶大定期戦は六月十九日二時から京大グラウンドで行われ、京大が着実な得点をあげたのに反し、慶大はよく走りながらも攻守にアンバランスで振わず京大が快勝、対戦成績は京大三勝、慶大九勝（引分け一）となった。

京大 13（8－6、5－3）9 慶大

また、第七回甲南大対慶大定期戦は、六月二十日西宮球技場で行はれ慶大が後半、よく攻めて七連勝した。

慶大OB 17－6 京大OB
慶大 9（3－3、6－2）5 甲南大

天城、井原高に栄冠
全日本高校岡山県予選

全国高校ハンドボール選手権大会岡山県予選

▽男子一回戦
矢掛高 11－6 関西高
津工 8－6 倉敷工
青陵高 13－3 林野高
天城高 15－0 勝間田
操山高 12－3 玉野高
岡山工 18－0 瀬戸高
倉敷高 10－9 津高

▽二回戦
津工 7（5－2、2－4）6 矢掛高
天城高 14（6－2、8－1）3 青陵高
津商 13（6－4、7－2）6 操山高

▽準決勝
岡山工 9（5－3、4－3）6 倉敷高
天城高 7（7－1、0－2）3 津工

▽同決勝
津商 12（7－4、5－7）11 岡山工
天城高 11（6－4、3－5、1－0、1－1）10 津商

▽女子リーグ戦
津高 6（4－2、0－2、1－1、1－1）5 落合高
青陵高 4（1－1、3－2）3 津高
井原高 10（4－0、6－1）1 青陵高
青陵高 4（1－1、3－2）3 落合高
井原高 6（1－2、5－2）4 津高
井原高 11（6－2、5－1）3 落合高

お願い――地方在住のハンドボール関係者による〝地方通信〟〝地方大会戦績〟その他各地方ハンドボール界に関するニュースの寄稿を歓迎致します。特に地方選手権に関する記事は万難を排して掲載するつもりです。御協力下さい。宛先は東京都千代田区駿河台四ノ六体協内日本ハンドボール協会編集部まで。

××××海外ハンドボール通信××××

▼六月十二日からアムステルダムで行はれた世界女子十一人制選手権大会はヨーロッパの強豪六ケ国（ルーマニア、デンマーク、ドイツ、ポーランド、オーストリア、オランダ）が参加して行はれ、十九日の決勝には、ルーマニアとオーストリアが顔を合はせた結果ルーマニアが圧倒的な強さを示して文句のない優勝を飾り、世界女子ナンバー・ワンの定評を改めて誇示した。

▽決勝
ルーマニア 10（7－0、3－2）2 オーストリア

（編集部・注）この大会は参加六ケ国をA・B両プールに分け各プールの上位二ケ国が決勝リーグを行うと云う試合方式で行はれた。なお、この大会では、大会要綱の一つとして試合場は芝生のグラウンドで行うと云うことを申し合せており、この決定はオリンピックを開こうと云う日本の国内球技場に批判が起きている時、注目をあびるものであろう。

▼日本遠征に迎うルーマニアチームは六月七日、八日カントンで地元二チームと対戦二勝した
ルーマニア 21－13 広東陸軍
ルーマニア 16－11 全広東

▼国際ハンド・ボール連盟が伝えて来たヨーロッパにおける最近の七人制国際試合のスコアは次の通り

▽男子
ドイツRDA 34（18－9、16－4）13 フィンランド
スエーデン 16（9－9、7－7）16 ドイツRFA
デンマーク 15（7－5、8－4）9 オーストリア
ドイツRDA 18（7－9、11－7）16 ハンガリー
デンマーク 18（8－8、10－8）16 ポーランド

▽女子
デンマーク 16（11－1、5－4）5 ポーランド
デンマーク 11（5－6、6－3）9 ドイツRFA
デンマーク 12（6－3、6－3）6 オーストリア
ルーマニア 11（2－3、9－2）5 ユーゴスラヴィア
デンマーク 13（7－4、6－3）7 ドイツRDA
ユーゴスラヴィア 5（0－2、5－3）5 オーストリア

高校生のための「ハンドボール」（その一）

岡村　昭二

ハンドボールに限らず、あらゆる競技種目についても云えることは、そのマスターは〃身体と精神の鍛練以外にない〃ということである。即ち、基礎になる自分の身体がすこぶる健全であり、かつその機能も優れなければならないし、強固な意志と適応性のある精神を有していなければならない。これらは、すべてその競技種目＝ハンドボール＝に没頭し、ハンドボール・ライフの中において自分自身を鍛えあげていく心算りが必要である。このような生活態度の積み重ねによって、優秀なハンドボール・マンの誕生がみられるのである。

東京オリンピックには、当然ハンドボール競技は加えられるであろう。また、世界選手権や国際試合などの桧舞台も現在の高校生諸君が主軸となって活躍されることになる。諸君が素晴らしい素養を身につけられ、心・技ともに日本のハンドボールマンとしての誇りを昂揚して頂ければ、何とうれしいことだろう……。

＜FWのコンビネーション＞

初心者のハンドボールから順次述べてみよう。（一通りの個人プレーは修得したものとして考えてみよう）

(1) ノン・ドリブルでパス・キャッチを確実にする。

ハンドリングは、ハンドボールにおいて最も大切な技術である。動的状態におけるパスは単に味方にパス（渡す）するというのではなく、味方のダッシュを更に強めさせる役割もになう（従って、ややダッシュ・コースの前方にパスをする）、また相手にカットされないボール・スピード・パス・コース及びパス・フェイントが含まれていなければならない。追風や向い風、ボールが雨や泥で汚れている場合などの色々の条件も考慮に入れて、如何にパスをしなければならないか考えてみよう。

キャッチも同様なことが云えよう。特に大切なことは、強いボールを恐れてはならないことだ。来日したルーマニアチームのプレヤーが、ロングパスや困難なボールを受ける時は、腹部に抱え込む様にしてキャッチしていた慎重さと確実さは、ハンドリングの悪い我々としては大いに見習う要がある。

キャッチはパスに通じ、パスはキャッチに通じる。常に関連をもったこの二動作を、一日も早く一動作として処理出来るようトレーニングに励みたい。

(2) ジョッキングとダッシュの区別をつける。

この区別は明瞭につけなければならないただ単にだらだらと走っているのでは、コンビネーションの一助になるどころか、却って味方FWの邪魔にさえなることがしばしばある。それは、他のFWの動きをさまたげ、むしろバックの防禦態勢を容易になさしめる。前述したボールの処理もスピードを欠くきらいがある。この区別は、パスを受けると否とにかかわらず重要なことだ。

(3) 一目のうちにFW全体の動作を包含できるように努める。

視野を広めること。即ち、今自分はダッシュしている。ボールは誰が持ち、どこにパスをしようとしているか？　他のFWはどこでどのように動作しチャンスをねらっているか？　バックと布陣とどこが抜き易いか？　GKの重心移動とバックとのコンビはどうなっているか？　などの凡てをそれも一瞬のうちに眼でつかみ、頭で考え、手足を動かせることが出来なくてはならない。これは練習を重ね、年期が入り、上達するに従い一つ一つ考えるよりも早く、全体を統一して感じられる総合的カン（反射）が生じてくるものである。このことからも練習中、サイドコーチすることは大切だと考えられる。例えば、ハーフマッチや練習試合の際に、動きについての指示を与えられるとゲームの展開や自分のなすべき動作が次第につかめてくるものである。そして、これらの経験は、その後の反覆練習によって無駄な動きが減りそのエネルギーは高度な技術の有効な消費に使用されるようになるのである。

以上、〃FWのコンビネーション〃について必要なる条件をあげたが、初心のうちには、その一つ一つをマスターするように、毎回のフォーメーションまたはハーフマッチの際に、単に走り動いた「疲労度」をもって『ああ、随分練習したから技術も大分上手くなったろう』と思ったら大間違いで、一回の攻防戦の時には、ダッシュを考え、『ダッシュのみに気をつけてやってみよう』次には『キャッチに気をつけてみよう』と試みて、他は少々悪くても絶対にボールだけは落さないといった具合に練習を続け、次には、そのなかの二つ…例えば、ダッシュとキャッチを忘れないで徹底的に行い、次には、ダッシュ、キャッチ、パス…ホローの動作などと自分自身で課題を与え、次第に課題を増やしていって総合判断力を養成するように自分の練習過程において自ら努力しなければならない。故に練習で最も大切なことは、自らの研究心であり、あらゆる事柄を見つめて、自分のものとする努力が、自分の向上には最も近道であることを忘れないで欲しい。同じことを反覆練習することは、身体的・技術的に大切なことはいうまでもないことだが、よく考えながらしなければならない。教わっただけを動くのでは意味が半減してしまう。色々聞き、読み、見て実際に行ってからよく考え、掘り下げて研究して頂きたい。

諸兄姉の投稿を歓迎します。建設的な意見をどしどしお寄せ下さい。四百字以上二千字以内、特に〆切日は設けません。氏名（紙上での匿名自由）住所、年令明記の上、東京都千代田区神田駿河台四ノ六日本ハンドボール協会編集部まで

中学校に於ける　ハンドボールの指導

連載①

山岡二郎

まえがき

ハンドボールが好きだからやめられない。

ハンドボールが好きだから現場指導から離れられない。こんな気持ちで今日迄ボールを楽しんできたので別にこれといって深い研究をしたのでもなく、学理的な裏付けを持たないことなので「こうだ」とか「こうすべきだ」とかいう断定的な発言はできないが、わたしはわたしなりの考え方で指導法を考えて今日迄たどたどとやってきた。その過程を赤面しながら書いていきたい。取上げて参考になるものだという自信は全くないが、どこかの地方で、どこかの学校の指導者が、わたしと似たような気持ちでやっておられる方があるかも知れない。この人達が「そうだなあ」と読んでいただけたら幸だ。

中学校に於ける問題点

中学校に於けるハンドボールには幾多の難問があるが、その中でも最大な問題は、新しい指導要領の中からハンドボールの字が消え去ったということである。愛好者の並々ならぬ努力によって近年異常な進展をして競技人口の激増は他の種目が驚きの目を見張る状態迄になったものを、然し誰もが、がっかりしているだけでは解決できない問題で、更に倍する努力を積んでこの難局を打開しなければならない。新指導要領から姿が消えたということは全然やってはいけないというのではなくて、施設や用具や時間的の余裕のある学校では指導するように工夫する事が望ましいという程度のもので、指導者の工夫研究によって時間を生み、これに打ちこむことも可能なものであることを再確認したい。

更に考えるなら、用具や施設の問題が取上げられよう。学校によっては指導要領にないのだからゴールをつくる費用は出せない。ボールも買ってもらえない、こういった例の学校が多いと思われる。現にわたしの近くの学校でもこんな意味のことを言って「困った困った」とこぼして居られる方がいた。然しこれは前述のことに関連していることで結局は指導者の努力と工夫で言決できる問題である。何とかしてやりたいと願うならば正式の事はできなくとも解決の道は開かれる。然しこうしたことの解決策を書くことも現今の中学のハンドボールに関係のあることで不必要なことではないが、この本を手にされる方々は、こうした難問を次々に解決しておられる方々と思われるのでこれ位にしておきたい。

小学校から中学校への移行

中学校に於けるハンドボールの目生えは何といっても小学校に於けるドッチボールであろう。小学校のドッチボールが発展して中学校のハンドボールに移り更にバスケットボールに移るということを前提として考えてみたい。現存の小学校で扱っているドッチボールは過去のドッチボールとは大分方法が変っていて外野と内野に一人づつの強力な者がいてその二人の攻撃によって勝敗を決するようなものではなく、誰もが投げ、誰もが受け止めるような形式のものになっている。このドッチボールの指導が投げて当てることにのみの指導であって、投げること受けることの指導があまりなされていない。更に大切なことはボールが大きくて投げると言うより推すといった形容の方が当っている。スローではなくてプッシュだといいたい。それと受ける方では受け止めるのでキャッチするのではない、ストップといった方がよい。この欠点は、ボールの大きさからくるもので使用球を小さくしてやれば充分スローの味も、キャッチの味もあぢわえる。（これは、五十三糎のボールを使って一時間の指導で小学校六年生の男子は結構楽しめるようになることを経験した）又ボールのキャッチやスローだけを一時間中指導しても大して苦にならないように、楽しく面白く指導するか否かは指導法の工夫にある。この基本的な指導がなされないで直ちに応用動作の（総合動作）指導に移るから先さにいって色々のあい路が出てくる。ドリブル一つだってやってみればそれだけで結構一時間を充分楽しませることができる。小学校に於けるこうした指導がなされておれば次の段階に、再びスタートにかえることはない。このことは、自分で小学校に出向いて指導してみて言えることだが、現段階に於ては、小学校に次のハンドボール指導を絵がいて指導して載ける方がいるか否かにある。若しこれが望めたら中学校に於けるハンドボール又はバスケットの指導は非常な発展をみることができると思う。

熊本に於て今日の発展を見ることができたのは、遠く小学校指導に目をつけたことに原因していると思われるが、これについて何れ委しく書くチャンスがあると思うが、北川氏の工夫研究は見のがせない。

君は、ドッチボール指導を一歩進めて、ハンドボールの基本指導とを組み合わせた、ハンドドッチボールを考案している。これによるとドリブルと攻撃方法がハンドボールに形式で、守備をサークル内で行うところはドッチボール形式である。これはやってみて確に興味の点ではドッチボール以上のものである。これもやはり基本になる点は前述のような点に注意する必要がある。このような研究者が各地方に大ぜいいるのではないかと思う。折角こんなよい雑誌が編集されているのだから今後大いにお互いの研究を出しあってこの技の普及につくすよう努めたい。

盛んな中共、東独とも交流

日本とは互角の実力か

海外ハンドボール界から

中共でハンドボールをやっているそうですがどの位の実力ですかと云う質問をこの頃よく聞く。ハンドボールをしている国では日本に一番近い国と云うことで、この中共ハンドボール界の動静へ関心が持たれて来たのは当然だろう。そこで――

中共がハンドボールを始めたのは第二次世界大戦後であり、その歴史は、わが国に比べてもかなりの差がある。しかし、その成長ぶりはまことに目を見はらされるものがあり、実力的にはかなりの抜術を備えているようだ。これは中共のスポーツによる国家振興と国名宣伝の一端をハンドボールがになっているとも思え、他スポーツ界における中共の躍進ぶりを見ても、中共のハンドボール界は更に急速な発展を遂げると予測される。一説には、中共の国内選手権は五月に始って九月に終ると云はれ、そのニュースを聞いた時には、その規模の大きさに驚ろかされたが、これはどうやら間違いらしい。しかし、国内全チームが、予選に参加し、国内選手権に参加すると云うシステムが採られており、丁度、日本の都市対抗野球や高校野球のようなシステムだと思えばよいのだろう。日本でもこれらの大会は予選から数えれば本大会の決勝まで三ヶ月近い。しかし、このことから見ても、中共のハンドボールが、短時日に実に多くのチームを養成したかが判り、流石、共産圏と思はざるを得ないが、その実数は詳らかにしない。一般の関心もかなり高いようで、来朝したルーマニアチームもカントンで二試合しており万余の観衆が集ったと云っていた。中共の実力を知るには、今のところ殆どそのデータがないが、昨年十一月、東ドイツ選抜軍が中共遠征に赴いた時のスコアを参考に供しよう。余談だが、東ドイツがこの遠征中、一九六一年（昭和三十六年）に日本訪問をしたいと発言したニュースが入ったが、協会側に聞くと「呼びたい意向はあるし向うも来たいらしい。しかしお互いに正式な交渉は何も行はれていない。今のところ白紙の状態だ」とのことだった。さて、東ドイツは中共で十試合十勝の成績だった。すなわち（上段スコアが東独）

対HFK北京	19―7
対全北京軍隊	21―14
対北京県選抜	30―8
対全ウハン市	25―10
対ウハン県選抜	21―10
対全カントン市	23―8
対カントン県選抜	31―18
対全カントン軍隊	17―9
対全上海市選抜	20―1
対センシー県選抜	18―6

と云う成績がそれだ。これを見ても判る通り、比較的軍隊チームがよく戦っている。これは中共のハンドボール界の中心は軍隊ではないかと云うことだ。そうなれば、日を追うごとにその実力は上るだろう。

（杉山）

話題のチーム②

中京大学の巻

地方学生界の成長ぶりは、最近のわがハンドボール界の大きな特長の一つですが、その中にあって最も注目を集めているのは今月御紹介する「中京大学」でしょう。日本のハンドボール界で愛知県の占める位置は非常に大きく、一般、高校、女子各界に全国的な強豪を輩出して長い間、ハンドボール王国をおう歌していますが、その愛知球界でも「中京大」はまだ新参者。ましてや全国的には無名に近いチームです。しかし、その実力は、今や関東、関西勢の上位校に劣らないのではないかと云はれるほど強力なもので、一部では七月十三日からの全日本学生選手権での黒馬ぶりは、芝浦工大の三連覇成るか以上にみものだとさえ云はれています。中京大は昨年全日本高校選手権で優勝した中京商の兄さん株に当る学校だけに、中京大の選手も中京商の選手が主力で、昨年創部と云う歴史の浅さは現在の二十余人の部員の中に三年生が一人しか居ないのでも判ります。監督は名工大OBの藤松博氏、今シーズンすでに春の東海学生室内、五月の東海学生と二つのタイトルを無人の野を行くが如き圧勝ぶりで掌中にしてしまい東海学生では文字通り無敵。その真価を自他共に問うのが全日本学生選手権でしょう。六月末から合宿に入ると云う気力と斗志はかってよく、特にそのパスワークのよさは愛知県のハンドボール関係者も口を揃えて〃一級品〃だと推せんしています。チームの主力は羽上田、森川、伊藤、近藤と云った一・二年生で、それだけに試合のカケ引きで関東、関西の中央勢にゴマ化されるかも判りませんが、愛知ハンドボール協会常任理事の宇津野年一さんは「力対力なら芝浦工大にだって見劣りしないでしょう。特にそのパス・プレー、フェイント技術の巧さは学生界のトップレベルです」とその実力を高くかっています。難を云えばデイフエンスがやや甘いことですが、ともあれ地方学生界にこのようなチームが生れたことは日本のハンドボール界のために喜ばしいことで、中京大の活躍ぶりを大いに注目したいものです。

国際戦を見て想う

＝基礎プレーこそ勝つ道＝

日本独自のプレーを考えよ

高山　修
（投稿）

昭和三十一年の秋に、西ドイツが訪れた時、我々は、始めて見るゴールエリア附近のローリング、オフエンスに一驚し、あの広いコートを三回ぐらいのロングパスをタテに通して自陣へ攻め込む、その豪放な攻撃に目を見はらされたものである。それから四年、日本のハンドボール界も国内レベルは、大きく飛躍したと伝えられ、特にこの間、全日本の四大タイトルを独占すと云う考えつかないような偉業を遂げた芝浦工大と云う大チームも現われ、今回のルーマニアチームに対しても、かなりの善戦と期待していたのだが、開幕してみると、やはりその彼我の差は、ルーマニアと日本のハンドボールの歴史に差がかなりあるのと同じように、まだまだ世界のトップグループとは技術的なへだたりがあることが改めて知らされた。私の感じから云えば西ドイツとルーマニアのハンドボールはまるっきり違う。西ドイツのあのキメのこまかいハンドボールに対して、ルーマニアのそれは総てに大まかである。技の西ドイツ、力のルーマニアと云う程度の色分けがはっきり出来るぐらい、そのチームプレーにはお互いにはっきりした別がある。どちらのプレーがよいかと云うようなことは後で述べるとして、私が強く感じたのは、西ドイツは西ドイツなりに、ルーマニアはルーマニアなりに自分のプレーを持っていると云うことである。おそらく昨年の世界選手権の決勝で顔を合わせた両者の一戦は、お互いの特長と持味をフルに活かしあった熱戦であったろうとルーマニアチームのプレーを目でおい乍ら、先年の西ドイツのプレーを思い出して私は一人でうなずいていた。

そこへ行くと、日本のハンドボール界は日本としての戦法と云うものを持っていないような気がする。まだ発展期にあるのだから、日本プレーなどと云うものはない。国際試合から学びとるのだと云う考え方もあり、おそらく、その考え方が支配的なのであろうが、しかし、西ドイツ選手の平均一米八十台の上背から投げるパスや、ルーマニア選手のあのストライドは先天的なものである。日本選手が、その体躯を考えないで、いたずらに外来チームの表面的なプレーを採り上げようとするなら、それは余りにも愚考と云うべきであろう。私は、ある人から今度のルーマニア来日に当って日本側の幾人かの関係者は少くとも互角の戦いが出来ると確信しているらしいと聞かされて、ヘエーと思った。そう云われて、私はついぞ最近、国内の大きな大会を見ていない不勉強に気がついたのだが、一方では、それほど日本のレベルが向上し、世界第二位のチームに対してハッタリでも、それだけ云えるだけに成長した斯界を頼母しく思ったものだった。ところがどうだろう。第一戦、第二戦と日本チームのプレーを見ていると走るべき所を走らず、投げるべき所を投げない。わずかに全日体大が第三戦で試合らしい試合をして見せてはくれたものの、少くとも〝互角〟ではなかった。一大学チームであれだけなのだから全日本ならと云う声も聞こえないではないがそれは欲である。全日体大戦の翌日、東京中日新聞紙上で全日体大の荒川監督が「全日本を組んでもこの差はちぢまらないだろう」と語っているのは謙虚なそして、日本チームの実情をはっきり示した言葉だと思った。

日本のハンドボール界に対してもし苦言を許されるならそれは、外来チームから好プレーを学びとるのはよいが基本プレーが出来てからやってくれと云うことである。そして同時に、西ドイツだ、ルーマニアだなどとあまり云わないで、日本人の体格に合ったプレーを指導首脳は心がけるようにして欲しいと思う。先にも云ったように西ドイツのプレーにしたって、ルーマニアのプレーにしたって、その根底をつきつめれば、彼らの秀れた（日本人と比較して）体格の上に立脚している。ボールを片手でソフトボールのように扱うと云うことは日本選手にはムリな話である。それならそれで、それに代る日本流のプレーを考え出して対抗すればよい。西ドイツ式のローリングオフエンスを消化しているチームが日本にないと云ったらおこられるかも知れない。しかし、それは日本の国内試合のみに通じる西ドイツ式オフエンスであって西ドイツ式のオフエンスを日本選手が西ドイツとの試合でしたからと云って決してよい成果は期待出来ない。大きなデイフエンスを前に攻めあぐんでいると云った印象しか与えないであろう。

国際的には通用するプレーをどうせなら身につけて欲しいのである。それにはローリングだ、ハイ・パスだなどと云わないで一発必中の弾丸シュートを打てるような練習をしたり、常にどんな時でも六人攻撃、六人守備の出来るようなスタミナの養成を優先すべきである。今回の国際試合を例にしたって、ルーマニアの監督が日本チームを試合後評する言葉はほとんど「シュート力がないと」と云うことだ。ハンドボールをよく知らない人が聞いたらシュートを満足に打てないと云う言葉は野球選手がバットを振れないのやサッカー選手がボールを蹴れないことと同じように考えるだろう。ハンドボールではよく走ってよいシュートを打つことが第一だとどんな選手も教えられているハズである。バックスも守備専任者と云う概念を捨てなければなるまい。ルーマニア選手を見てもシュートこそあまり打たないが、バックスの何れもが、誰が六人攻撃に加っても、立派にそのFWのローテイションにとけこんでプレーしている。全中大戦の後半で、HBが三人とFWが三人で攻撃を行い、FWのセンタースリーが自陣に残っていた場面が一、二回あったが、私は、これは大量リードに気を許したルーマニアの遊びとは思えない。

投書欄

OBリーグの実現期待

貴誌創刊号にも実業団ハンドボール待望の論説が各所に見られたが、斯界はたしかにこの問題の実現に努力しなければいけない。しかし早急に実業団チームが沢山生れるとは思えぬことであり、正直に云って、なおかなりの時日を要そう。そこで私は提言したいのだが大学を卒業すると殆んどのハンドボール経験者がハンドボールから遠のきボールを手にする機会を失う。あるいはサッカーやバスケットなど類似のスポーツに移ってしまい極言すれば他競技の人口を増してやるような現状だ。それを防ぐために実業団が軌道に乗るまで是非関東、関西ともOB戦（リーグでもトーナメント）を行って疎遠になったOBを駒沢や西宮のなつかしいあのグラウンドに連れ戻す策を立てて貰えたらと思う。OB同士の交歓も出来るし、選手寿命も競技人口の維持にもなると思う。現役学連の強化も大いに結構だが、東西の各学連がこんなことを考えてくれたらと思い、一筆とった。（長野在・一OB）

協会、二つのヒット

日本ハンドボール協会を最近みなおしたことの一つに、ルーマニア戦で全日本を編成しなかったこと、国体の高校男子のワクを大巾に広げたことの二点がある。これまでの協会は体育としてのハンドボールの普及に重点的でありすぎ、対意外的図のもとに行われる企画が皆無に等しかったのだが、国際試合と云うと、すぐ全日本を作りたがる日本のスポーツ界にあって、ハンドボール界が新しい方向を打出してくれたことは嬉しいし、早急にナショナルチームを作る必要がないだけに（オリンピックまであと四年もある）底辺の拡充を意図して単独チーム中心の日程編成はよかったと思う。こうしたことが刺激になって全国の個々のチームが張切るようになれば協会も本望だろう。もう一つ、国体の高校男子のワクを広げたのは良策だ。これからの選手の供給源は高校界をおいて他にない。特に、オリンピック選手は即成のプレイヤーではアテにならない、現在高校あるいは大学初級にいるものが、その対象になるのであって、鳳雛の温床たる高校男子界を大きくクローズアップさせるような今回の措置は、各地区でも大いに歓迎されていることだろう。こうした措置によって高校チームが増加することも充分考えられる。最近よく実業団ハンドボール界の早急な実現を呼びかける声が強いらしいが、それも確かに重要ではあるが、小生はむしろ若い選手層の拡充が国際舞台を目指す斯界では優先されるべき問題であると思う。欲を云えばサッカー界が昨夏行って成果をあげたと伝えられる〃高校地区選抜対抗〃に似たプランを実現したら一層よいだろう。それには各地に優秀なコーチャーが輩出しなければならないと思う。（大阪・関心寄世男）

質問欄

問　戦前に現在の全日本総合選手権のような大会がありましたでしょうか。行われていたなら各回の優勝チームも併せて教えて下さい。（静岡県・倉田・優）

答　「全日本選手権」と云う大会が立派に行われていました。ただし現在のように北から南まで二十チームを越すような参加チームはなく、東京の大学チームが中心でした。各回の決勝記録は左記の通りです。なお、女子は昭和十五年と十七年の二回開かれています。

▽男子第一回（昭和十二年）
大塚クラブ（東京） 6（2—0, 4—4）4 日体

▽第二回（昭和十三年）
日体 17（10—6, 7—3）9 明治大

▽第三回（昭和十五年）
日体 13（8—3, 5—2）5 慶応大

▽第四回（昭和十七年）
日体 7（3—1, 4—0）1 慶応大

▽女子第一回（昭和十五年）
倉敷高女（岡山） 3（2—1, 1—1）2 梅花高女（大阪）

▽第二回（昭和十七年）
倉敷高女（岡山） 3（1—0, 2—2）2 津山高女（岡山）

問　レフェリーをするにあたってゴール周辺の攻防の場合、特に攻撃側のアドヴァンテージはどのように注意すべきでしょうか。（東京・TT生）

答　レフェリーを行う場合、一番難しいのがこの処置です。反則のあった場合、直ちにホイッスルを吹くのがレフェリーの基本的な態度であり、第一歩の技術なのですが、実戦では、反則を犯した側に有利になるケースが多々あります。混戦から抜け出て攻撃側の選手が、相手のハッキング、プッシング、ホールディング等を振り切ってシュート、チャンスがある場合レフエリーがそうした反則に目をとめてホイッスルを吹いてしまったら攻撃側は一たん動作を止めねばならず（ゲーム中断）そこからフリースローを得たもののむしろ攻撃側にしてみればフリースローを与えられるよりも（即ち反則をその場でとらず）そのまま試合が連続して運行された方が有利です。御質問の要旨はこのようなケースに関するものかと思いますが、当然、これは試合を続行すべきで、前にさかのぼってのジャッジは慎しまなければいけませんが、攻撃側のシュートの成否を待って改めてホイッスルを吹き、シュート直前の反則をとり、フリースローを与えるのが良策でしょう。攻撃側の速攻を止める手段としての意識的反則には特に攻撃側優先を採るべきでこれはハンドボール界向上のためにもなりましょう。

読者の質問をお待ちしております。ハンドボールに関することなら技術、審判、記録、その他の問合せなんでも結構です。要旨をハガキに書いて東京都千代田区神田駿河台、日本ハンドボール協会内機関誌編集部までお寄せ下さい

今月の問題

専門パート設けて一考を

＝陽の当らぬ女子ハンドボール界＝

コーチの不足やルール改訂も原因

ハンドボール関係者なら総てが知っての通りもともと、ハンドボールは一九一〇年代にドイツで女子のゲームとして発生した競技だ。その後、男子の間でも急速に発展、普及し、それから我国に紹介されたために、我国ではヨーロッパ諸国に比して、女子スポーツとしての普及度ははるかに低く、男子のレベルが国際的に見てもAの下と云われるほどに上達しているのに反し、女子のそれは非常に低い。もち論、国際試合の経験もなく、国内においても女子スポーツ界ではマイナースポーツの域を脱するにはまだかなりの時日がかかりそうな現状だ。

日本のスポーツ界を見渡して、フットボールやラグビー、斗技のように男子に限られたスポーツを除いた各競技で、特にバレーボールバスケットボール等は男女の関心度普及度が平均し、女子スポーツとして人気のある競技は非常に関心が高いと云うことを筆者は以前から注目していたのだが、残念ながら我国ハンドボール界では最近、女子ハンドボールがやや取残された感じで、それがためにハンドボール界全般に非常にマイナスになっているような気がしてなない。

もっとも、地方ハンドボール界では、女子ハンドボールの秀れたコーチが輩出しており、まるっきらり日本の女子ハンドボール界を不毛の地呼ばわりするのに言が過ぎるわけだが、しかし昭和三十二年以後、例の女子七人制統一の規定によって、以前ならば一人のコーチによって男子、女子同一コートで指導が出来た利点が消え、十一人制、七人制と云うルールその他の違い、戦法的な相異の関係から、そうしたことが絶対に不可になってしまったことは、ますます女子ハンドボールの発育を止めてしまった原因の一つとして忘れることが出来ない。七人制に統一能されてから三年、若いコーチも育っており、この問題はやがて時日が解決するだろうと云うメドはあるものの、絶対数には限りがあり、早急な解決は無理と云うものだろう。コーチの不足はチームの増加を防げ、チームの不足は試合数の増加を防げると云う悪循環を呼ぶ。強いては、それが女子ハンドボール界の向上のガンとなり、日本ハンドボール界全般のマイナスになると云うことを関係者は改めて認識しなければいけない。日本の女子ハンドボール界の中心は高校界である。と云っても今春一月末現在、同一県内に五チーム以上の女子高校チームを有する県協会は十二(男子は二十六)を数えるにすぎない。更にワン・トーナメント組める（即ち八チーム以上、トーナメントの組合せで準々決勝以後がフルに組めるもの）県協会は僅かに茨城、静岡、愛知、大阪の四県。男子十六県の四分の一にすぎない。斯界の主柱と云われる高校界ですらこれでは大学界、クラブ（含実業団）界の現状はお寒い限りで、殊に大学チームはその数も極度に少く、年間公式戦を十試合出来ればよい方らしい。これで、女子のレベルを引き上げようと云うのは余りにもムリな話である。また、女子ハンドボール界に新鮮味がないと云う声も実はこうした所に源を発するのである。名門と云われるチームは何年も依然その地区のNO・1に君臨し、これを打倒するチームが生れて来ない。だから、大きな大会があると簡単に予想を立てられる。そしてその予想通りにコトが運ぶのだから天下泰平なワケだがしかし、これでは真の斯界の向上は望めない。それだけに今春の全日本総合室内で熊本クラブが初優勝に輝やいた話題は実にフレッシュであった。

日本のハンドボール界はしなければならないことが多い。オリンピック種目の決定もそうだし、国際交流の促進もそうだ。しかし、そうした大きな希望の礎石となるのは国内の充実にあることは他言を要さない。特に、ハンドボールの一般的な関心を増すには女子選手の増加と女性ファンの獲得が第一でありそうしたことを忘れ勝ちなのは、なんとしても肯けない本部協会内に「女子チーム強化普及特別委員会」と云った専門パートを設けるのも一案であろう。

ニュース スクラップ 新聞記事から

ルーマニア・チームの来日が今月は最大の話題でスポーツジャーナリズムにとりあげられたニュースも、国際試合関係が圧倒的に多かった。

※

（日刊スポーツ（東京）六月十七日シグナル欄から）『日本対ルーマニアのハンドボールの第一戦で全早大はルーマニアに一方的に敗れた。世界第二位（一位はドイツ）のルーマニアと、欧州から紹介されて二十余年の歴史しかなく普及度の低い日本とのレベルの違いといってはそれまでのことだが、技術的にはやっぱりスケールの差であり、つきつめるところは体力の違いであろう。しかしどのスポーツでも体力の違いを理由にしていては、日本人は常にハンデを負わされることになる。最終戦では対戦する最強の全芝浦工大のチームワークと日本人特有のこまかいプレーに期待されるが、大きな外人チームに対しての作戦は大いに研究してほしい。東京オリンピックの正式種目となるためにもそれは必要である。』

※

地方読者にお願い……地方紙にのったハンドボール記事のスクラップを是非編集部あてにお送り下さい。

第十二回全日本総合ハンドボール選手権大会実施要項

一、主催　日本ハンドボール協会
秋田県、秋田県教育委員会
大曲市国体実行委員会、湯沢市
国体実行委員会、大曲市教育委員会、湯沢市教育委員会

二、主管　秋田県ハンドボール協会

三、期日　昭和三十五年八月十日十一日、十二日、十三日、十四日（五日間）

四、場所　男子種目　大曲市
女子種目　湯沢市

五、申込〆切期日　昭和三十五年七月二十三日必着のこと。

六、申込場所(1)東京都千代田区神田駿河台四の六日本ハンドボール協会(2)秋田県大曲市大曲市役所、大曲市国体実行委員会事務局内第十二回ハンドボール選手権大会事務局右二ヶ所に同封申込用紙により申込むこと。

七、参加資格　各都道府県協会を通じ日本ハンドボール協会に登録済みの高校以上の男女

八、参加料　一チーム壱千五百円也を申込書と同時に大会事務局に納入すること。

九、参加人員　(1)男子種目一チーム監督一名、選手十五名（監督が出場する場合には、十五名の選手の中に登録されていなければならない。）(2)女子種目一チーム監督一名、選手十二名、申込後のメンバーの変更は一切認めない。

一〇、一泊三食付　（主食代含む）六五〇円別紙宿泊申込書に記載の上参加申込書と同時に申込むこと申込後の取消し変更は運営上多大の支障をきたすので一切認めません。

一一、抽せん　昭和三十五年七月二十五日（月）午後四時本協会全国理事会において行う。

一二、監督会議　昭和三十五年八月九日（火）午後三時より左記において行うので代表者は必ず出席のこと。
男子種目　大曲市役所会議室
女子種目　湯沢市公民館

一三、健康証明書　医師の診断による出場選手の健康証明書（様式随意）を参加申込書に添えて大曲市、第十二回全日本総合ハンドボール選手権大会事務局あて届けること。

協会だより　担当　宮崎顕一郎

都道府県協会の昭和34、35年度の本部協会に登録されたチーム実数を比較してみようと思います。

登録総数	695	(648)			(35.6.1)
一般男子	158	(141)	一般女子	46	(44)
大学男子	43	(37)	大学女子	1	(2)
高校男子	291	(276)	高校女子	156	(148)

特に増減のある県

愛　知	66	(43)	東　京	71	(56)
大　阪	71	(59)	熊　本	14	(23)

数字はチーム数（　）内は34年度実数

1960年度版のルールブックが出来上りましたので御紹介します。〝よもぎ〟色の表紙で、字画も研究された102頁の非常に明解なものです。

購入方法は、各都道府県協会で一括現金引換にて、又は個人で直接本部協会に注文される場合でも必ず現金引換（1部 100円）にて求められる様、部数に制限がありますのでなるべくお早めにお願いします。

お知らせ

本誌の御購読は直接本社へ

雑誌「ハンドボール」の御購読は
東京都千代田区神田駿河台三の二
日本スポーツ新聞社業務部
又は東京都千代田区神田駿河台四ノ六
日本体育協会内日本ハンドボール協会編集部へ直接お申込み下さい。
（振替貯金口座東京92682番）

年間四回発行（今年度は6月（既刊）7月（当号）9月、12月の予定）です。
料金は年間二百円（一冊五十円）で年間購読者は送料を当方で負担します。
一冊毎の読者は五十八円（送料を含む）を御送付下さい。

編集後記

▽…ルーマニアを迎えての国際試合たけなわの中で第二号を編集しました。国際試合はそうたびたび行われるワケではありません。幸運な年に本誌は創刊したものです。

▽…国際試合は全国で十試合、そのうち六試合を中心にして本号はお送りしました。残りの四試合は第三号に廻します。

▽…あわてて国際試合の回顧特集号を出すより、二回にわけて、その全部をゆっくり運営面、技術面、彼我の差などを解明してみたいと思ったからです。

▽…そうゆう内容を本号に期待した読者諸兄姉には失礼をすることになりますが、編集者側の配慮を御理解下さい。

▽…第一号は、お蔭様でお叱りより、おほめの言葉の方が多かったのは嬉しいことでした。ハンドボール界に雑誌が生れたと云うことだけで喜んで下さった方が多いことが、編集者をもっとも感激させました。その期待に応えるためにもよい雑誌にするよう努力する心算です。

▽…お叱りの言葉の内訳は、誤植が多い。執筆者にバラエティを、片寄った編集をさけよ。地方界の動静を正確にキャッチせよと云ったことが大半でした。一々ごもっともです。

▽…盛夏八月。学生、高校、教職員、総合と四つの全日本選手権が各地で開かれます。どうか、沢山の方々が、色々な角度からの原稿をお寄せ下さるようお願いします

▽…また、この人にこのような原稿をという御希望もお聞かせ下さい。

▽…技術原稿や日本ハンドボール史、先号のこの欄でお約束しながら、今回は果して充分その意を汲める原稿が揃ったかどうかと思うと不安です。執筆の方々には短い期間でご迷惑をおかけしました。

△…海外ハンドボール史を研究していらっしゃる方、ハンドボールの起源についてデーターをお持ちの方をどなたかご存知ありませんでしょうか。

（S・S）

ハンドボール 第一巻第二号
昭和三十五年七月一日印刷 編集兼発行人 宮沢宏之 発行所 日本スポーツ新聞社 電話代表一一四一～四番
昭和三十五年七月五日発行 監修 日本ハンドボール協会 東京都千代田区神田駿河台二ノ二 振替口座東京九二六八二番
定価五十円 〒八円